

2023 年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

2024 年 2 月

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

例 言

1. 本書は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が2023年度に実施した、夏期研修旅行の報告書である。
2. 夏期研修旅行は、文化遺産学演習Ⅰ（ゼミ）の受講生が参加し、各ゼミ単位で実施した。
3. ゼミの担当教員は、以下のとおりである。
國下多美樹（文化遺産学専攻教授）・北野信彦（同）・神田雅章（同）・木許 守（同）
4. 研修旅行の実施に際して、以下の機関・各位のほか、多くの方々のご支援を賜りました。記して感謝の意を表します（順不同、敬称略）。
小嶋善邦（岡山県古代吉備文化財センター）・平井典子（総社市埋蔵文化財学習の館）
西井 亨（尾道市文化振興課）
5. 本書の編集は、木許の指導のもと、各ゼミから選出された委員により組織した編集委員会が行った。編集委員は、以下のとおりである。
池浦里咲（國下ゼミ）・楢田健太郎（木許ゼミ）・関元隆明（北野ゼミ）・堀川楓華（神田ゼミ）

目 次

Ⅰ. 岡山県岡山市・総社市の遺跡と関連施設の考古学的踏査……………（國下ゼミ） ……	1
Ⅱ. 尾道市の文化財保護行政を識る……………（木許ゼミ） ……	10
Ⅲ. 文化財科学（北野）ゼミの夏期研修旅行の概要……………（北野ゼミ） ……	17
Ⅳ. 熱海・箱根の文化遺産をめぐる……………（神田ゼミ） ……	29

I. 岡山県岡山市・総社市の遺跡と関連施設の考古学的踏査

2023. 8. 08～8. 09

はじめに

担当教員：國下 多美樹

目的と意義 考古学ゼミでは、各地の史跡、博物館等の施設を見学して、考古学の実物に触れ、見識をひろめると共に、ゼミ生相互の交流を図ることも目的として実施した。

見どころ・課題の設定 例年の通り、研修地の選定では、ゼミ生全員の意見を聴取し、提案地の史跡等施設の内容を確認、吟味した。今年度は、具体的な日程、予算の点から、岡山県南部の岡山市、総社市を中心とする吉備地域を対象として実施することになった。

吉備地域は、弥生時代から古代に至る重要遺跡が密集して存在する。特に古墳の出現にかかわる埴丘墓や儀礼用の土器、巨大前方後円墳など、時代の変化や地域史を考える資料が豊富に見学できる利点がある。また施設も充実している。

このような残りの良い遺跡、遺物の実物を見学し、考古学的知見を広め、各自の研究に生かすことを課題として設定した。参加者は、見学地を分担して関連資料を集め見学のしおりを作成し、現地で解説する形式での見学を行った。分担は日程の項目に示した。

なお、見学に際して、岡山県古代吉備文化財センターでは小嶋善邦氏、総社市埋蔵文化財学習の館では平井典子氏に解説をお願いした。実物に触れる機会をいただきながら見学できたことに感謝申し上げたい。

日程の総括

詳細は下記の通りである。炎天下でもあるから、岡山市、総社市の移動はマイクロバスをチャーターして見学した。

8/8(火曜日) 早朝、新大阪駅に集合し、新幹線で岡山駅へ移動。岡山駅西口バスターミナルで吉備交通マイクロバス乗車。(県道 242 号経由 8.2km 19 分) <環境解説：木井荘太>

10:00 古代吉備文化財センター 見学(1 時間) <赤坂咲衣担当>

11:10 吉備津神社 (見学 30 分) <宮崎なな・川崎凜担当>

12:00 総社市埋蔵文化財学習の館 見学(1 時間) <大川由翔担当>

13:00～13:50 昼食 お食事処 前田

14:15 備中国分寺跡 (30 分) <岸本悠馬解説>

14:00 こうもり塚古墳見学(40 分) <池浦里咲担当>

15:00 造山古墳見学 (40 分) <西村雪・瀧欣怡担当>

16:00 楯築遺跡見学(40 分) <出口新担当>

17:30 岡山市宿泊、懇親会

8/9(水曜日) 岡山駅から JR 赤穂線播州赤穂行きに乗車、長船駅からタクシーで移動。備前長船刀剣博物館を見学<谷田朱里担当> 長船駅に戻り、岡山駅(解散)

見学の栞：『2023 年度演習 1 (考古学ゼミ) 研修旅行



総社市埋蔵文化財学習の館見学の様子



造山古墳見学施設

ゼミ研修旅行レポート：赤坂咲衣

考古学ゼミの夏期研修旅行は2023年8月8日～8月9日の2日間で岡山県総社市・備前市に行った。

初日は、古代吉備文化財センターへ行き、小嶋善邦さんに展示・施設案内をしていただいた。一階の展示室ではセンターが行った発掘調査の出土品が時代・テーマごとに展示されており、岡山県の歴史を知ることが出来た。企画展は「広がるムラとその景観」が開催されており城殿山遺跡、和田谷遺跡、マキサヤ遺跡からの出土品が展示されていた。つぎに、吉備津神社を訪れた後、総社市埋蔵文化財学習の館を訪れ、館長の平井典子さんに古代吉備の成立と繁栄について説明していただいた。吉備の地理的特徴（広い平野と肥沃な土地、災害が少なく温暖な気候、海上・陸上交通の要衝）、水稻耕作伝播による社会の変化、吉備の弥生社会（土器製作技術の伝播、集落祭祀、墳墓祭祀における特殊器台・特殊壺形土器など）、古墳時代の吉備（塩・米の生産）について学んだ。そして昼食を食べた後に、備中国分寺跡、こうもり塚古墳、造山古墳、楯築遺跡を見学して回った。

備中国分寺は、天平13(741)年に聖武天皇の命令によって諸国に建てられた寺院の一つで、寺の範囲は南北約180m、東西約160mある。南辺中央に開く南門やその北側に建つ中門が発掘された。現在の国分寺は江戸時代中期に再興されたもので、高さ34mの五重塔は国指定、庫裏・経蔵・裏書院は県指定の重要文化財になっている。

こうもり塚古墳は6世紀後半築造の墳長約100mの前方後円墳で、全長約19.4mの横穴式石室があり石室には波形石と呼ばれる石材を刳り抜いてつくられた家形石棺が置かれている。

造山古墳は5世紀前半に築かれた墳長約350mの巨大な前方後円墳である。三段につくられた墳丘は、斜面を葺石で覆い、各段に埴輪が飾られ、前方部には九州の凝灰岩でつくられた石棺が残っている。



古代吉備文化財センター見学風景

翌日は、備前長船刀剣博物館を見学した。一階の展示を見ながらガイドの方に、備前長船の歴史と備前刀、日本刀が出来るまでの工程などを詳しく説明いただき勉強になった。2階の展示室にもたくさんの刀剣が飾られており、それぞれの刀についても説明を聞いた。

この2日間の研修旅行を通して吉備地方について学ぶことができ、また、事前に吉備地方や見学場所について皆でそれぞれ調べていたのでより理解でき良かった。

〈参考〉

岡山県古代吉備文化財センター『岡山県古代吉備文化財センター』

平井典子「古代吉備の成立と繁栄」(2023.8) 総社市埋蔵文化財学習の館

岡山県古代吉備文化財センター『国指定史跡こうもり塚古墳』(2021.11)

岡山県古代吉備文化財センター『吉備路の歴史 こうもり塚古墳とその周辺』(2020.11)

備前長船刀剣博物館『備前おさふね 刀剣の里』

史跡こうもり塚古墳見学から考えたこと

：池浦里咲

今回のゼミ旅行では楯築遺跡・史跡こうもり塚古墳・造山古墳など岡山県内の遺跡を複数見学した。本レポートではその中でも特に印象に残った史跡こうもり塚古墳の活用計画書の内容や見学することで考えたことを記述する。

こうもり塚古墳は古墳時代後期に築造された前方後円墳で岡山県内最大の規模であるとも言われている。こうもり塚古墳は1968年2月に史跡指定され、2021年には『史跡こうもり塚古墳保存活用計画書』⁽¹⁾が作成された。現地では雑草の除去や通路の設置などされており安全に見学ができた。また、同保存活用計画書では雨漏りによる横穴石室内部の滞水について言及



こうもり塚古墳墳丘

されていた。⁽²⁾ 見学した前日は台風の影響で大雨であったが玄室内が滞水している状態は見られなかった。このように、現地を見学して保存活用計画書と比較して改善しているのではないかと思う点もあった。

現地を見学して特に目を引いたのは横穴式石室である。こうもり塚古墳の横穴式石室は石室の全長 19.4 m・玄室の長さ 7.7 m・羨道の長さ 11.7 m の両袖式の石室であった。横穴式石室内部は見学ができるように整備されており、羨道まで見学が可能で羨道より奥には鉄柵で石棺が厳重に保存されていた。横穴式石室内部に入って目につくのは巨岩 3 枚から成り立っている天井石である。この天井は平天井という近畿地方の横穴式石室とも共通する構造をとる。天井・壁は巨大な花崗岩で形成されており古墳の埋葬者の地位が現れるようであった。中心部に置かれた石棺は家形石棺で浪形石と呼ばれる岡山県産の貝殻石灰岩が使用されている。このような、近畿地方と一部共通する墓の構造からも何かしら大和政権と政治的なつながりがあったのではないかとされている。見学することで横穴式石室の実際の大きさに驚いた。大和政権が岡山県内の勢力を重要視していたことは知っていたがこれほど大規模な古墳を古墳時代後期に築造するのは驚きであった。

大型の前方後円墳は古墳時代中期後半から築造が減った。そのような時代背景の中 800 基以上の古墳があるとされている備中南部平野でこうもり塚古墳は半世紀ぶりに築造された大型の前方後円墳である。他にも、奈良県橿原市五条野丸山古墳とのつながりが指摘されている。今回、史跡こうもり塚古墳の見学を通じて改めて考古学を学ぶ上で広い視野を持って研究すべきであることを実感させられた。自身の研究でも限定された地域だけ見るのではなく幅広い地域を見ることを意識したいと考えた。

註

- (1) 岡山県古代吉備文化財センター「第 9 章史跡こうもり塚古墳」『史跡こうもり塚古墳保存活用計画書』2021 年 p. 69
- (2) 岡山県古代吉備文化財センター「第 9 章史跡こうもり塚古墳」『史跡こうもり塚古墳保存活用計画書』2021 年 p. 72

岡山でのゼミ旅行を通して：大川由翔

今回、考古学（國下）ゼミのゼミ旅行では、岡山県を訪れた。総社市埋蔵文化財学習の館と楯築遺跡についてとても印象に残っている。本稿では、その 2 カ所を訪れた際の感想等について述べようと思う。

まず、総社市埋蔵文化財学習の館について述べよう

と思う。同館は、平成 6 年 3 月に完成した施設であり、岡山県総社市内で出土した考古遺物を保管しており、その一部を展示公開している。展示室では、模型などを置き、よりわかりやすい展示を行っていた。

館内施設としては、1 階に一般展示室、2 階には開架展示室がある。1 階の一般展示室では、農業生産のたかまりを背景に、「吉備」という大きな勢力の中心となった総社市とその周辺の特質に焦点を当てた展示がされている。2 階の開架展示室では、復元した土器などを保管しているとのことだが、通常一般公開はされていない。今回の訪問では、2 階の開架展示室は残念ながら見学することができなかったが、1 階の一般展示室を見学させていただいた。

1 階の一般展示室では、先述の通り模型などの展示品が多くあり、よりイメージもしやすくとてもわかりやすい展示がされていた。私は博物館学芸員資格の取得を目指しており、そのために日々勉強を重ねている。博物館学芸員資格を取得するために受講必須の授業等で展示の仕方やより効果的に見せる方法などについて学んでいるが、模型を使用しての展示は観覧者の立場として実際に見てみると、言葉での解説のみの場合に比べて、展示内容の理解がしやすいなということを実感することができた。それと同時に、模型展示がいかにも効果的な展示であるかということを理解することができた。次に、楯築遺跡について述べようと思う。楯築遺跡は岡山県倉敷市矢部に所在する弥生時代後期に



楯築遺跡弧帯文石見学の様子

造られた墳丘墓で、円丘部とその両側に長方形の突出部をもつ特異な形をしている。突出部の大部分は昭和40年代に行われた開発工事で破壊されたが、消滅した突出部を含む全長は約80mと推定され、同時期の墳丘墓では全国でも最大級の大きさを誇っている。1976年から1989年にかけて岡山大学考古学研究室が行った発掘調査により、中心主体となる埋葬は木棺の外側を木の板で囲んだ木棺木槨構造であることがわかっている。木棺の底には、総重量32kgを越える大量の水銀朱が分厚く敷き詰められており、その上には鉄剣1口と勾玉や管玉、ガラス製小玉などの玉類が副葬されていた。

楯築遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての墓制の変遷を考える上で重要な遺跡であるとして、国の史跡にも指定されている。

さらに、日本遺産にも登録されており、『「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～』として、「弥生時代後期に築かれた墳丘墓で、その大きさは全国最大級である。頂に立つ5個の巨石は、温羅伝説の中で吉備津彦命が温羅との戦いで築いた楯の跡と伝えられている。」というストーリーの位置づけがされている。

そのような指定がされている楯築遺跡では、遺跡について解説する解説看板があったり、道がきれいに舗装されていたりと、遺跡を訪れる人々のための整備がされていた。楯築遺跡の重要性をさらに知ってもらうため、また、人々が訪れやすくするために、このような整備はとても重要であると感じた。

実際にモノを見たり、古墳を訪れたりするということは、知見を深めるためには欠かせないものであるということを今回のゼミ旅行を通して改めて理解することができた。「百聞は一見に如かず」という言葉の通り、今後も様々な場所を実際に訪ねてみるということを大切にしていきたい。



こうもり塚古墳石室内部

【出典】

・文化庁 “「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま”
日本遺産ポータルサイト <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story064/> (2023年11月8日)

ゼミ旅行：川崎凜

今年のゼミ旅行の行先は岡山だった。私は地元が岡山だったということもあり旅行気分という感じではなく地元への帰省と遊びに出かける感覚でこのゼミ旅行に参加した。ここではそんな私のゼミ旅行での経験や学んだことを書いていく。

ゼミ旅行の初日は、主に岡山市と総社市を一周するようなコースだった。総社市といえば、古代には吉備国があった場所として有名であり古墳が各地に残っている。そのため土師器や須恵器をはじめとし、特殊器台などといった数多くの出土遺物が出土した場所でもある。最初に訪れたのは岡山市にある岡山県古代吉備文化財センターだった。文化財センターの一階部分は展示室となっており、選りすぐりのものが展示されていた。展示品の説明を職員の方からいただいた中で、目に留まったものがあった。それは陶棺である。今まで陶棺というものを知らなかったので強く自分の中で印象に残っている。展示品の説明を読んでもみると、「陶棺というものは古墳時代後期から飛鳥時代にかけて使われた土製の棺であり、多くは古墳の横穴式石室から発見されている。陶棺はこれまで九州から東北地方にかけておよそ700基出土しており約8割を岡山県が占めている。」と書かれていた。2階では出土した遺物の調査・研究しているところにお邪魔させてもらった。

次に訪れたのは吉備津神社だった。ここでは時間が押していたため充分に見学することはできなかった。その次に総社市埋蔵文化財学習の館を訪れた。そこで弥生時代の吉備の社会から古墳時代の吉備の出土した遺物を展示していた。ここで学んだことは、当時は土器を使って塩を生産していたことや、最古の製鉄の遺跡が存在していたことなどといった当時の生活が知ることができたことだ。そこから昼食をはさみ、備中国分寺跡、こうもり塚古墳、造山古墳、楯築遺跡を見て回った。こうもり塚古墳は石室には入ることができないが石棺を見ることができた。こうもり塚古墳の石棺は蓋が屋根形をした家形石棺で県内産の石灰岩をもちいているため近畿地方と異なり吉備独自のものであるということが分かった。またこうもり塚古墳は6世紀後半に築かれた墳長約100mの大型前方後円墳で、中四国、九州地域では最大級の規模を誇っていることなども現地で見学することができた。石室に供えられていたものや陶棺に関しても前述した岡山県古代吉備

文化財センターにて展示されていたので近畿地方との関わりでもたらされた可能性があるということも分かったことの一つである。

ゼミ旅行では楽しい時間も勉強する時間もあってよい思い出になった。

古代吉備文化センターで学んだこと：木井荘太

古代吉備文化センターを見学して、当センターでは、啓発と記録の保存に力を入れていると感じた。啓発に関しては、多くの人にセンターを訪れてもらい、遺跡や考古学自体に興味を持ってもらおうとしている。その中でも特に、小学生・中学生に向けた活動が多い。学校やクラス単位でセンターに足を運んでももらったり、体験をしてもらったりすることで、まずはセンターや体験での出来事を覚えてもらう。その後、彼らが成長した際の話題の一つとしつつ、その会話の中で考古学や文化財に興味を持ってくれる人を少しでも増やして、将来考古学や文化財の保存活用に携わる人を増やそうという考えをセンターの関係者は持っていた。また、人に足を運んでもらうだけでなく、センターの職員らが実際に、瓦や土器など、実際の遺物と同じものを製作し、SNSなどにあげることで職員らも体験を通して学び、その経験を次の教育活動に生かすということもおこなっていた。

どれだけ歴史や社会科の授業で地域の歴史を学んでも、座学だけではあまり印象に残らず、地元の遺跡などに興味を持つ人は少ないと思われる。しかし、実際に体験を通して学んでもらえば、記憶にも残りやすく興味を持ってくれる人が増えると考えている。私も実際に地元の発掘調査に何度も参加して、そこで道具の使い方や発掘の流れ、作図のコツなどを実際に目で見て、体を使って学ぶことができた。また、地元の遺跡に触れることでその遺跡や地域の歴史により興味を持ち、もっと知りたいと思うようになった。そこでの経験は、後の発掘の際に役に立ったり、より考古学や発

掘、遺跡に興味を持ったりするようになった。このように、考古学に実際に触れる機会があることで、考古学や遺跡に興味を引いて、その道に進んでくれる人は一定数いる。特に高い好奇心を持ち、将来どんな道に進むのか未知数な子供に対して行うことで、考古学に進む人を増やす効果をより高められると考えられる。

また、古代吉備文化センターは周辺の自治体や岡山県とも連携して文化財の保存にも力を入れていた。例えば、古代吉備文化センターは3DスキャナーX線スキャンを所有しているが、岡山県の文化財の保存のためにセンターだけでなく他の自治体などに対してもすぐに使えるように対応していた。その他にも、センター単体では、収蔵庫の容量問題が起きてくる。古代吉備文化センターも収蔵庫は多くの遺物が収容されており、あまりスペースはなかった（写真）。しかし、岡山県は県全体で連携し、他の施設に収蔵品を移すなどしていた。私の地元の埋蔵文化財センターでは、収蔵庫が埋まりつつある問題について岡山県のように周りの施設との連携で解決しようとはしておらず、センター内で収蔵を工夫しているのみという印象を受けた。

私の出身自治体も収蔵庫問題を早めに県全体で対応していた岡山県を参考に、遺物の収蔵方法の検討を進めておくべきではないかと考えた。

備中国分寺跡について：岸本悠馬

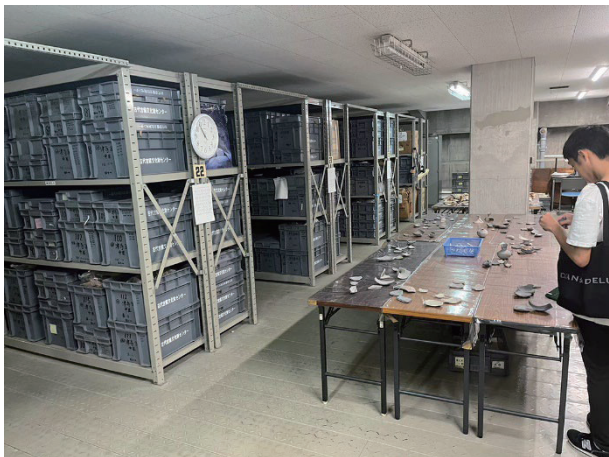
現在の備中国分寺跡には、江戸時代中期に再建された建物が建っており、日照山国分寺と呼ばれている。国の指定史跡である。

備中国分寺は、聖武天皇の勅願を契機として天平13年頃から造立がなされ、天平の薨という言葉に象徴されるような七堂伽藍を備えていたと考えられる。

『続日本紀』には、寺院の造立についてのことや造仏や写経をさせたこと、運営していく上での決まりなどが記されており、当時の状況の内容や規模がうかがえるようになっている。

寺の軸線は北16度西に偏し、周囲の水田に見られる条里制と一体化しており、地割に周到な計画性があると見られている。伽藍地は四周が基底部の幅4尺の築地によって画され、東西550尺、南北600尺の規模であった。南門は、間口5間、奥行2間の5間門で、桁行の柱間が西から東へ9尺、10尺、12尺、10尺、9尺、梁間は11尺等間である。中門は南門と同様に間口5間、奥行2間の大きさと見られる。桁行は西から9尺、11尺、12尺、11尺、9尺で若干南門を上回る規模である。金堂や講堂などの主要堂宇は、現国分寺の他の建物と重複しているため、位置を想定することは難しくなっている。

また、伽藍配置は現国分寺の境内の広さと丘陵の状



古代吉備文化財センターの収蔵庫

況を踏まえると、中軸線上に南から南門、中門、金堂、講堂と直線上に並ぶ一般的な国分寺式であるとは考え難くなっている。しかし、礎石の状況などを手がかりとして、中門の正面奥に講堂、前面の西に金堂、向き合う東に塔を置く法起寺式の可能性が考えられている。

実際に現地を見学して、地割に計画性はあるようであったが、伽藍配置を推定することは現段階では難しくそうであると感じた。

遺構としては、南門と中門の中間付近の西側に大井戸が発見されている。この井戸は寺域のなかでも正面に位置することから僧の日常生活にかかわるものではなく、行人に清水を与えるためのものであったと推定されている。また、中軸線の東側からは陶製の小塔破片を共伴した望楼状の建物が検出されている。

出土した遺物のなかでも、軒丸瓦は第一類から第八類まで分けられ、創建時の天平期のものから桃山期と見られるものまであり、文様の特徴に富んでいる。軒平瓦も同様に第一類から第八類まで分けられ、他の遺跡などと同範とされるものや類似するものが見られるなどの特徴がある。遺物としては他にも、平瓦や丸瓦、塼と共に須恵器や土師器、釘類や鉄滓などが検出されている。新羅風の獣面をあらわした鬼瓦や、鴟尾なども含まれており、注目すべき遺物が多くある遺跡である。

参考文献

「備中国分僧寺跡 上林寺国分地」『総社市史 考古資料編』(1987) pp. 357-370

『続日本紀』天平13年3月乙巳の条。

吉備の歴史と文化を探る：瀋欣怡

研修旅行は、私たちにとって知識を深め、新たな視点を開拓する機会だった。この旅行では、吉備の歴史と文化について深く探求し、多くの新たなことを学ん



備中国分寺跡

だ。初日に訪れた総社市埋蔵文化財学習の館は、私たちに吉備地域の貴重な文化財と文化遺産についての洞察を提供した。博物館内で見学した展示物は、弥生時代や古墳時代の遺物、装飾品など、吉備地域の歴史を示す証拠だった。私たちは、これらの展示物を通じて、吉備の文化がどれほど豊かで多様であったかを理解した。さらに、館長から得た情報や説明により、吉備地域の歴史的背景や文化的発展についても理解を深めた。

吉備の弥生時代についての学習は特に興味深かった。弥生時代は、農耕技術の発展や鉄器の導入など、文化的な変化が起こった時期だった。総社市埋蔵文化財学習の館では、弥生時代の遺跡や出土品を見学し、その時代の生活や文化についての理解を深めた。弥生時代の吉備地域は、他の地域との交流も盛んであり、新たな技術やアイデアの導入が行われたことがわかった。特に、陶器製作や住居構造に関する情報が貴重であり、弥生時代の吉備文化について新たな理解を得ることができた。

また、墳墓祭祀における特殊器台の創出について学んだことも印象的だった。特殊器台は、古墳時代の墳墓祭祀において使用された特別な器具であり、その役割と意義についての知識を深めた。古代の人々が墓地を祭祀の場としてどのように活用し、祖先への敬意を示したのかについて考えさせられた。

見学を通じて、吉備の歴史と文化について深く学び、新たな洞察を得ることができた。総社市埋蔵文化財学習の館は、吉備の過去を保存し、未来に伝える重要な役割を果たしている。吉備地域の美しい自然環境、弥生時代と古墳時代の遺跡、そしてその歴史的な遺産は、この地域の豊かな過去を証言している。今後、この新たな知識と見識を活かし、吉備地域の歴史と文化についてさらに研究を深めていくことが、私たちの使命であると感じている。そして、この知識を次の世代に伝え、吉備の過去を尊重し未来を創り出す一助となることを願っている。



総社市埋蔵文化財学習の館見学の様子

備前長船刀剣博物館：谷田朱里

岡山研修旅行では、備前おさふね刀剣の里 備前長船刀剣博物館を訪れた。今回は、その前後で学んだことをまとめることとする。

長船刀剣博物館では、南北朝時代とその前後の時期に製作された刀剣がまとめられた特別展を見学した。南北朝時代の刀剣の特徴としては、広い身幅と大鋒（おおきっさき）を持ち豪壮な姿をしていることが挙げられる。その特徴は蒙古軍が日本を侵略しにきたことがきっかけとされており、戦闘スタイルの変化が影響している。南北朝時代には相州伝を加味した「相伝備前」と呼ばれる鍛法が誕生した。代表的な刀工は「兼光」「長義」である。

そもそも、備前刀とは平安時代後期より備前国（現在の岡山県東南部）で発達した鍛法であり、五箇伝の1つに数えられる「備前伝」によって作刀されたものである。

備前国では、ヤマト政権を支える有力豪族たちが支配していた土地の一つであったことから刀の需要があった。また、刀の材料となる良質な砂鉄が採れる中国山地や、水や炭などが豊富にある吉井川流域など、立地面においても、品質の高い刀を作るのに適した条件がそろっていたこともあり、古来より鍛冶産業が存在していたとされる。

備前伝において、最初に盛んになった刀工集団は「古備前派」と称され、鎌倉時代初期頃まで繁栄していた。古備前派の開祖と伝えられている「友成」が作刀し現存するものは国宝や重要文化財に指定されており、非常に高い評価を受けている。

鎌倉時代になると複数の刀工集団が勃興する。初期に出現した「一文字派」は、時代ごとにいくつかの流派に分かれるが、南北朝時代初期頃まで続く一派となった。鎌倉時代前期には、後鳥羽上皇により「御番鍛冶」と称する作刀制度が設けられ、月番制で作刀するために全国から13名の刀工が招聘された。鎌倉時代

前期には、一文字派の中でも吉井川流域に位置する「福岡」の地で興った「福岡一文字派」から7名もの刀工が御番鍛冶に選ばれた。

さらに、鎌倉時代中期には備前伝を代表する一派といわれるほど繁栄した「長船派」が登場する。この一派は美しさと質実さを両立させた作風により、日本刀の歴史における最大の流派にまで発展を遂げる。戦国時代に入り、武器としての日本刀への需要が高まじ続ける中でも、長船派の刀工たちは大量生産と高品質を兼ね備えた作刀をした。それらの刀は「末備前」と呼ばれている。その目覚ましい活躍から、「備前伝といえは長船派」といわれるほどに高い評価を受け、室町時代末期まで隆盛した。

1590年、吉井川にて大規模な洪水が発生し、長船派の刀工たちは壊滅的な被害を被った。これにより作刀活動が続けられなくなった長船派は没落してしまった。

参考文献

刀剣ワールド 五箇伝「備前伝」（最終閲覧日：7月11日）

【刀剣ワールド】備前伝（touken-world.jp）

ゼミ旅行について：出口新

今年の夏、考古学ゼミで、岡山県を訪れることとなった。岡山県の吉備地方は古代から独特の文化を作り上げ、その地域の持つ力は、当時の中央政権に肩を並べるほどであり、考古学的に見てもさまざまな発見があった場所である。今回の研修を通して、自分が実際に見て体感したことを書いていきたい。

自分が最初に感銘を受けたのは、総社市埋蔵文化財学習の館である。総社市の古代における農耕、祭祀、そして、そこから生まれる争いについて、地方の小さな学習施設とは思えないほど、貴重で興味深い出土品等が展示されていた。ここでは、館長の平井典子さんに解説してもらいながら施設を見て回ったが、吉備



備前長船の里 備前長船刀剣博物館



楯築遺跡の一枚岩と自分の体を比較する筆者

地方、そして、総社という地域が当時、農耕に長けており、大きな力を持っていたことがとてもよくわかった。また吉備地方の祭祀土器は、他の地域には見ない進化を遂げており、その特徴は、考古学的にも珍しいものであることもよくわかった。自分はこの時になぜ吉備地方にこれだけの力があって、なぜ政治の中心となることが無かったのかが疑問に感じたが、この疑問は、今後自分でも研究してみたいと感じた。これだけの食糧の供給が多く地方として発展を遂げているのならば、何かしらの理由があるはずなので、今後調べていきたいと感じた。

もう一つ自分にとって、面白いと感じた場所は、楯築遺跡である。楯築遺跡は弥生時代後期に作られた墳丘墓であり、さまざまな器台形の土器や壺型の土器が発掘され、考古学的にも注目されている遺跡である。

この墳丘墓には、上部にストーンヘンジのように巨大な一枚岩が円状に建てられている。伝説では吉備地方の支配者である温羅が飛ばしてくる矢を防ぐためにきづかれたものだとされているが、研究的には、何らかの祭祀のために建てられたものであると考えられる。

自分の体と比較をしてみたがその大きさは、とても簡単に運べるものでもないし、墳丘墓という山形の上のどうやって運んだのか、またどこか持ってきた石なのか、そしてこんなにも凝固にしっかりと建てられているのもとても不思議だと感じた。吉備地方のその独特な文化は、土器だけでなく遺跡そのものにも表れていてとても面白いと感じた。

今回ゼミの研修旅行に参加して、普段見ることのできない特殊な文化を持つ地方の遺跡、埋蔵文化財を実際に見て触れて、普段自分たちが見るものとは全く違うものがたくさんあることに気がついた。この岡山県という地方は今後も考古学における研究がたくさん実施され、これからさまざまな発見が生まれてくる大切な場所であることは間違い無いと感じた。今後も考古学を学んでいく中で、この岡山という地についても注目しながら、今後の自分の勉学に活用していきたいと感じた。

岡山県古代吉備文化財センターを見学して ：西村雪

岡山県古代吉備文化財センターは岡山県岡山市にあり、1984年に開所された。業務としては調査・研究、保存・収蔵、普及・啓発、指導・支援などを行っている。この中でも文化財センターの普及・啓発について見ていき、最後に私の地元の歴史博物館と比較して考える。

まず普及・啓発活動として吉備文化財センターでは講座や講演会、地元の遺跡関連イベント、体験学習、

現地説明会など様々開かれている。全て合わせると年に10回ほど開催されており、全て無料で参加することができる。幅広い層が参加するであろう体験学習イベントについては、夏休みの特別企画や吉備路の史跡を巡って周るイベントが開催されている。次に展示室についてである。展示室では県内各地の出土品が時代別・テーマ別に展示されている。総社市神明遺跡の銅鐸や、西江遺跡の特殊器台・特殊壺が主な展示品として挙げられていた。展示品の説明文や配布されている常設展示解説には文章にふりがなを振りながら解説がされている。特に常設展示解説用紙では主となるもののみを取りあげ、A4サイズに収まるように簡潔に、そして簡単な言葉を用いて構成されていた。また古代吉備文化財センターを見学する中で文化財に興味を持つ人の裾野を広げる事、特に小学生に対しての働きかけや意識を大きく持っているように感じた。そのことを実際に感じたのは子どもたちへの働きかけである。私たちが実際に収蔵庫を見学した時、本物の土器が時代の流れに沿って縄文土器から鎌倉時代の土器まで展示されており、それらに実際に触れて質感を感じることが出来た。更に、ばらばらになっている土器を組み立てて1つにするというワークショップのようなスペースも用意されていた。このような実物に触れる機会は多くあるものでは無く、また小さい頃のこのような体験は記憶として残るものであると考えている。

このように古代吉備文化財センターでは広い世代、特に幼い子どもたちに対してのアプローチを多く行っ



古代吉備文化財センター見学の様子

ていることがわかった。そこで文化財センターではないが、同じように地元の資料を展示している宇治市歴史資料館について考えてみる。宇治市歴史資料館では常設展示として宇治の茶づくりと巨椋池周りの米作りと漁業についてが展示されている。普及活動としては歴史講座や古文書講習会が行われている。ここでは宇治の歴史に興味のある人たちのみへのアプローチであり、文化財に興味を持つ人の数は増えることがない。そこで私は併設する図書館との合同のイベントを行うことが良いのではないかと考える。図書館では特に夏休みや冬休みなどに子どもに対して何かしらイベントを開いている。そこで資料館と内容を結びつけることで少なくとも、宇治の歴史を認識する人が増えるのではないかと考える。

今回の岡山県古代吉備文化財センターの見学では、文化財の裾野を広げるような活動が行われていることが分かった。このようなことをそれぞれの地方の施設が念頭に置いて活動することで、将来的に少しでも文化財に興味を持つ人が増えるのではないかと考える。

参考文献

- ・岡山県古代吉備文化財センター <https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/index-2.html>（閲覧日：2023/10/31）
- ・宇治市公式ホームページ歴史資料館 <https://www.city.uji.kyoto.jp/soshiki/89/>（閲覧日：2023/10/31）

その時代の景色を想像する：宮崎なな

岡山県は、交通路として古代から栄えていた瀬戸内海を要しており、気候も穏やかで安定した土地である。そのため、古墳時代にはヤマト政権から重要視され、巨大な前方後円墳がいくつも築造された。今回の研修旅行では、岡山県内にある古墳にいくつか訪れ、当時の岡山県とヤマト政権との関わりを感じ取ること



造山古墳墳丘上から見た景色

ができた。以下では、訪れた古墳ごとに学習したことを述べる。

楯築遺跡は、弥生時代後期に築造された墳丘墓である。自然の地形を利用しつつ盛り土を行って整えられている。円丘部が径約 50m、高さが 5 m であり、その規模は弥生時代の墳丘墓としては最大級とされている。墳丘頂部には 5 個の巨石が立っており、墳丘を築いた際に何らかの祭祀を行う場所であったと考えられている。1976 年の調査によって、墳丘には丹塗りの壺形土器が置かれていたことが明らかとなり、墳丘斜面には円礫の帯が回らされていることも判明した。他にも様々な大形で飾られた器台形や壺形土器等が出土しているため、非常に盛大な埋葬の祭祀が行われたと考えられる。墳丘の中心の地下に埋葬施設があり、棺の中には 30kg 近くの膨大な量の朱が入っていたとされている。

こうもり塚古墳は、古墳時代後期に築造された前方後円墳である。全長約 96m の前方部を東北に向けた二段築城の前方後円墳である。古墳時代中期後半以降大型の前方後円墳は築造されてこなかったが、こうもり塚古墳は半世紀ぶりに築造された大型の前方後円墳である。このことから、一度衰退した勢力が復権したと考える見方もある。また、奈良県橿原市に位置する五条丸山古墳との築造関係から大和政権との政治的なつながりも考えられる。こうもり塚古墳後部には横穴式石室が築かれている。羨道が玄室の中央についている両袖式の石室である。石室の全長は全国的にも大きい部類に入る。また、こうもり塚古墳の横穴式石室は玄室の平面形が長方形で、平天井などの特徴から近畿地方の横穴式石室の影響を受けていると読み取ることができる。

造山古墳は、5 世紀前半に築造された前方後円墳である。墳長約 350m、高さ約 30m で、全国で第 4 位の大きさを誇る巨大な前方後円墳である。墳丘の平坦な面や周りには多くの埴輪が立てて並べられ、墳丘の斜面には葺石が施されていた。造山古墳の周辺には千足古墳や榊山古墳などの古墳が 6 基あり、これらは大きな造山古墳の傍に従うようにつくられた陪塚であると考えられる。また、これらの古墳の石室からは古墳時代中期の列島内外地域との活発な交流を読み取ることができる。

研修旅行では、多くの岡山県内の史跡や文化財を見学し、学習してきた。それぞれの史跡や文化財から近畿地方との繋がりを発見でき、ヤマト政権との関わりが深かったこと、中国地方の要所であったことが読み取ることができた。また、実際に現地へ訪れることで、その時代の景色を想像することができた。

Ⅱ．尾道市の文化財保護行政を識る

2023. 8. 09～8. 10

学ぶべきことと、学んだこと

担当教員：木許 守

私たちのゼミは、広島県尾道市を訪れた。尾道市は、文化財保護行政、特に活用施策の先進地として有名で、多くの地方公共団体の文化財保護担当者も視察に訪れている。その際に窓口になり、実際に尾道市の文化財保護の実態について、講演・説明等の対応をしておられるのが、市の担当者である西井亨氏である。私はこれまで西井氏とは一面識もなかったが、まずは西井氏に電話し、文化財行政学を学ぶゼミで研修旅行として尾道をお訪ねしたいこと、そしてそこで可能であれば西井氏からのご説明として1時間ばかりのご講演をお願いしたい旨を申し上げた。ゼミの研修費としては講演料等の予算手当ができないから、かなり厚かましいお願いと思いつつの申し出であったが、西井氏は快く引き受けて下さり、あまつさえ街歩きに同行して下さり各ポイントで解説いただけるとのことであった。願ってもないことで本当にありがたかった。文化財行政学に限らず文化遺産学は現場がとても大切で、その最前線で活躍されている方のお話を伺うことほど勉強になることはない。

さて、尾道市は何故にさほど全国の文化財保護担当者の間で有名なのだろうか。その大きな要素は、文化庁ほか国の行政機関が打ち出す様々な施策に、市がタイムリーに呼应してきたことがあると思う。

尾道市は、平成20年(2008)に文化庁の文化財総合把握モデル事業の選定を受け、平成23年には「歴史文化基本構想」および「文化財保存活用計画」を策定した。そして翌平成24年に「尾道市歴史的風致維持向上計画」を策定した。さらに平成27年に日本遺産事業が開始されると、これらの計画を前提にして初年度に18件のうちの1件として「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」が日本遺産としてストーリー認定された。さらに平成28年に「日本最大の海賊」の本拠地：芸予諸島、平成29年に「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」が、シリアル型のストーリーとして認定された。

これらが、市の文化財を資源とする観光活用に効果的であったことは疑いなく、そればかりか、関連事業として率の良い補助金を得ることで未指定の文化財にも保存・整備の実績を残している。こうした手法と実績は、例えば国交省が発行している歴史的風致維持向上に関する法律を紹介する『歴史まちづくり』といっ

たパンフレットなどにも紹介され、広く全国の地方公共団体の文化財担当者が手本としているところである。

しかし、「尾道は初めから「優等生」であったわけではない」というのが、私の偽らざる認識である。それは1990年代にあった市民による景観保護運動のことを覚えているからだ。この発端は浄土寺近くに高層マンションの建築の計画が持ち上がったことにあった。その時に尾道の景観を守りたいと考えた市民らの有志が、腰の重い行政に頼ることができず、自らが資金を調達、様々な曲折を経てその計画地を購入し、そこに「尾道白樺美術館」を開館するという景観保存運動史に残る苦難の活動があったのである。これは、全国的に見ても市民運動が一つの形として結実した稀有な事例である。尾道市はようやく平成18年(2006)に景観条例を制定し、景観計画・景観計画区域を策定した。そして平成22年(2010)にその計画区域を市全体に拡大した。

もちろん、こうした過程で社会を取り巻く経済状況や産業構造の変化などがあったと思われるし、市民運動も角度を変えればまた違った見え方があるかもしれない。しかし、尾道から遠く離れた傍観者の目には、まず市民要望が先行して存在しそこに行政施策が追いついたと見える。そこに至るまでに行政の対応に大きな変化があったとも思われ、むしろこの変化にこそ注目しなければならないと考えるのである。変化、すなわち意識改革は口で言うのはたやすいが実際に行うとなれば、そこには大変な苦闘があったに違いない。それを2000年代から2010年代の約20年間に実践してこそその今があると考えべきである。ここに文化財保護担当者らの献身的な努力があったことも想起されるはずである。そしてその努力は今もなお継続している。

今回、引率者として尾道を訪れた理由の大きな理由は、受講生には、市民の文化財に対する意識と行政の対応の両者を知ったうえで、文化財保護行政の模範と言われる尾道市の文化財保護行政の一端と担当者らの努力の痕跡を見てほしいという思いがあったのである。

最後に、尾道市文化振興課 西井亨氏に改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

文化財のまち、尾道を歩いて：鋤田健太郎

文化財行政学ゼミの夏期研修旅行として、複数の日本遺産のストーリーに組み込まれている広島県尾道市を訪れた。そこで市の文化財担当職員の方から話を伺って考えたことと、実際に街並みを歩いてみて感じたこと及び尾道の抱える課題について私が考えたことなどを記していきたい。

1 日目は尾道市の港町エリアを担当職員の西井先生に案内してもらいながら散策した。港町エリアは近代において瀬戸内地域の金融・経済の中心地として栄えた建築物や街並みの姿を色濃く残した落ち着いた風景のあるレトロな風景だ。また、北前船貿易や石見銀山から続く街道沿いの港町として栄えていた近世の雰囲気というの微妙かに感じられた。私はこのような場所をぶらぶらと散歩することが好きなのでとても楽しかった。住友銀行尾道支店や尾道銀行本店などの魅力的な近代建築が外観そのままにまちづくりに活用されており、地域の人にとって大切な場として活かされている。このような景観の保全には市の努力だけでなく、地域住民の協力の元に成り立っているという話も伺った。景観計画区域内において一定規模以上の建築行為等を行う場合には市長への届出が必要であったり、大規模な広告物や派手な広告物の表示・掲出について一定の制限を行うなどの施策がとられている。またNPO法人や企業と連携し、空き家となってしまった古い建造物を改修し、宿泊施設として再利用するなど、古い街並みを残したままの活用がなされている。そして、そのようにして守られている古い街並みやしまなみ海道のルートに組み込まれていることから年々多くの観光客が訪れるようになったという。特に外国人観光客が急増しており、それに対応したグローバルな観光活用も推し進めているようだ。

西井先生がいう「文化財を活かしたまちづくり」は十分に達成されているように思えた。しかし、尾道の地理的な条件から浮き彫りになる課題点もあるという。



尾道 千光寺山からの風景

それは尾道の「坂道のまち」としての側面だ。2日目に実際に坂道エリアを散策したのだが、確かにこの急勾配と細くて入り組んだ街で生活するのは一筋縄ではいかないだろう。またこのような街の構造のため車が入ることも難しく、古い建物や歴史的建造物の修復においては不都合らしい。また、若年層の都市部への流出も目下の課題だ。尾道から出ていく人を食い止めるために「尾道らしさ」を活かした地域愛の創出も考えていかねばならない。

しかし、「尾道らしさ」を活かした地域愛の創出については半ば達成していると思う。2日目の自由時間に訪れた登録有形文化財向酒店店舗兼主屋の店主は、雑談の中ではあるが「生まれ育った街で思い入れも強いからこの街並みは変えずに大切にしたい」と言った。私自身、2日間滞在しただけだが古風で落ち着いた尾道の街並みのことが好きになったし、大切にしていくなさと思った。

尾道にしかない魅力というものを、次世代を担う若い人が正しく理解し活用することが今後も尾道が魅力的な街であり続けるために必要なことだと私は思う。再び尾道に訪れた時に変わらない魅力と新たな発見を得られることを期待したい。

尾道と文化財：村崎結愛

今回のゼミ旅行は一泊二日という短い期間だったが、有意義で充実した時間を過ごせたように思える。また、ゼミ生が各々で尾道の名所や見所について事前に調べていたので、予備知識がある状態で見て回れたことは、学習を深めていく上でよかったと感じる。また、尾道市文化振興課の西井亨先生には大変お世話になり、様々な質問にも答えていただき、非常に感謝している。

尾道は、港の発展に伴い埋め立てが行われ、北前船が来航していた歴史的背景もあり、同じ広島にある、軍事要塞的な港町の呉の様子とはまた異なっていると



尾道商業会議所記念館 吹抜けの階段状議場

感じた。近代まで商業の中心地だったこともあり、商店街の広さや立派な旧尾道商業会議所、旧三井住友銀行尾道支店などの銀行跡から過去の賑わいが感じられる。現在は衰退している商店街が多い傾向だが、尾道の商店街は人の往来も多く、アーケードも全面に設置され、古い店舗と新しい店舗が混在している。リノベーションして再利用されている店や昔ながらの看板から、レトロな雰囲気を感じた。旧尾道商業会議所は外観が洋風建築様式で、議場も赤い絨毯が敷かれていて非常に綺麗だった。金庫のダイヤルが数字ではなく、イロハニホヘト表記だったのが印象に残っている。旧三井住友銀行尾道支店はまちなか文化交流館として再利用されており、大きい窓やカウンターの位置から、銀行として使われていた名残を見ることができた。広島県で初めて住友銀行が進出したのが尾道市であり、それが県庁を置く場所をどうするか、広島市と議論されるほど重要だったらしい。

尾道は山が海岸線に迫ってきているような地形のため、平地が少なく、驚くような急斜面に家屋が建ち並んでいた。鉄道も市街地に近い場所に位置しており、線路沿いに街が形成されているように感じた。当日が雨だったのもあり、坂道や階段が滑りやすく、非常に危なかった。坂の住居では、宅配便を頼む際に別途料金がかかるというのも理解できるほどであり、車も通れる道がないのは生活するのには不便だと感じる。だが、約500年大きな自然災害や戦災に遭っていないため建物の残りが良く、古い建物と新しい建物が調和しており、それらが坂から海岸沿いまでぎっしり詰まったような独特な景観が見られた。また、狭い範囲に国宝が4件も見られるのは他の市町村でも類を見ないため、行政は景観を残すことにプレッシャーを感じながら、高さ制限や広告物規制、NPO法人との連携などの取り組みを行ってきた。千光寺展望台から見えるある企業の看板は、その色を赤から青へ変えてもらったものらしい。

浄土寺は、その境内地に多くの国宝、重要文化財等が所在している。宝物館に入ると両界曼荼羅図が壁一面に貼り付けられていて圧巻だった。図の周りに当時の檀家の名前が刻まれていて、その場所が、重要な文化財を保存する場所であり、地域の中心寺でもあったのが感じられた。宝物館にあった時計は、数字ではなく干支で時刻を知らせるものであり、今までに一度も見ることがなかったので、素敵だと思った。

尾道の文化財活用を通して感じたこと

：和田茉薫

2日間にわたる尾道観光を経て、文化財の活用に関して考えたことがあったので述べていく。

まず、観光1日目の中で、西井先生に話を聞いていて特に覚えているところについて挙げる。

1つ目は、文化財を活用するうえで建造物などをライトアップするという手法についてで、いくつか考えるところがあった。それまで文化財のライトアップというと、大学の講義の中で話題として出てきた所謂インスタ映えするカラフルなライトアップやプロジェクションマッピングの一時的なイベントを思い浮かべていたが、尾道では白いライトで寺院が毎日夜ライトアップされていると聞き、観光の見どころとしても防犯としても役割を果たしているの、文化財の活用として正解の1つなのではないかと思った。私が従来から考えていたカラフルなライトアップの方は、きれいで見ている人を喜ばせるかもしれないが、それは文化財を用いてやるべきことなのか、文化財の持つ価値や魅力をそれでは伝えられないのではないかと講義を経て考えるようになり、それ以来文化財のライトアップ事業にはあまり良い印象を抱いていなかったが、今回のゼミ旅行でその考えを少し払拭することができた。また、尾道は神社やお寺が多くてそれぞれの距離が近く、それらが坂道である所に建てられているものが多いために、特別にインスタ映えする景色を作らなくても元の地形と数から来る豪華さで観光客、また地域の人々に文化財の良さを伝えられているのではないかと考えた。

他にも、神社やお寺に防火システムとしてスイッチを押すと水が噴き出る仕組みを作ったという話には、それまで防火と言えば消防車以外に考えたことが無かったのでそういった方法もあるのかと認識を新たにした。このシステムがあれば消防車を待っている間にも消火活動ができる点がいいなと思った。尾道のような細道・階段の多い場所には現場に車で直接行けず、より時間がかかる可能性があるの、あると安心感が格段に違うなと感じた。スイッチで水が噴き出る仕様になっているということだったので、今後は自動化して人が火を見つけるより先に感知できるようになれば安



尾道市役所屋上からの風景

心ではないかということを考えた。

次に2日目に訪れた場所の中で、浄土寺を挙げておきたい。まずは感想として鳩がとにかく多く、最近あれほど多く鳩を見る機会がなかったので驚いた。また、宝物館を見た時には、宝物がしまわれているということは、温湿度がきっちり管理されているものだと思って入ったのでその蒸し暑さに驚いた。天井から掲げられていた絵画は傷みが激しい状況もみえ、未指定の絵画や仏像にも目を向けるべきなのではないかと思った。

最後に、尾道で訪れた場所で個人的に一番楽しかった「あなごのねどこ」の感想を書いておきたい。木造で外観はこじんまりとしたテーマパークのようで、人ひとりしか通れないような細い通路、そしてカフェ・宿泊施設・本と音楽を扱う店が混じった場所で、今までに見たことのない組み合わせと雰囲気胸が高鳴った。本と音楽を扱う店では「何者からかの手紙」というものに出会った。超短編小説で読みやすく、面白かったのだが全国どこでも手に入るようではないのでまた探しに行きたいと思う。

2日目はあいにくの雨で、尾道は猫がたくさんいると聞いていたものの1匹しか出会えず少し残念だった。しかし、素敵な街並みを見ることができ、文化財の保存・活用についても新たな知識を得られたので良い1泊2日の旅となった。

尾道を歩いて感じたこと：蓮井怜香

今回の夏期研修旅行では8月6日と8月7日に尾道市を訪れた。1日目は尾道本通り商店街、2日目は千光寺付近を中心に見学したが、この2日間を通して尾道市には中世から近代までの幅広い文化遺産が存在し、また観光地としてだけでなくそこに住む市民にとっても住みやすいまちになるようにまちづくりを行っている点が特徴的であると感じた。それは1日目に尾道市の西井亨先生の案内のもとまちなか文化交流館に訪れた際に強く感じた。まちなか文化交流館は、市の

重要文化財に指定されている旧三井住友銀行尾道支店を改装し、休憩スペースや交流のための貸スペースを提供しているものである。私達が訪問した時はリースペースに尾道の風景画を展示していた。中には小学生による作品もあり、幅広い年代から尾道市が愛されていることが窺えた。文化財は博物館等の文化施設や観光地として活用されることがほとんどであると考えていたので地域の人を対象として活用されていたのが新鮮だった。

また、まちなか文化交流館が建っている尾道本通り商店街については、実際に歩いてみて若者が想像以上に多いことや建物の活用が特に印象に残った。商店街というと年配者がお店を営み、そこに訪れる人も年配者であるイメージを持ちがちだが、尾道本通り商店街は若者を目にするのが多々あり意外に感じた。お店が入っている建物に関しては、昔の建物の外観をそのままにして活用していたので、風情のある商店街だと感じた。中でも銭湯であった建物が中華料理店になっており、出入り口に男湯・女湯ののれんが掲げられユーモアがあって面白いと感じた。

商店街といえば、私の地元の商店街も、以前フィールドワークで訪れた奈良県御所市の商店街もシャッター街になっていたのここまで賑わっている理由がどこにあるのか疑問に思った。西井先生のお話を聞きながら実際に商店街を歩いて、私は尾道市が観光地としてだけではなく一つのまちとして栄えている大きな理由は行政機関だけでなく民間団体や地元住民も町おこしや景観保護に積極的だという点にあると考えた。例としては尾道市に高層マンションの建設計画があった時に、住民が景観保護のための運動を展開し資産家も資金援助をするなど協力していたことが挙げられる。その結果買い取った土地に開館した美術館は、現在はMOU 尾道市立大学美術館となって大学生の作品が展示されている。また、どの地域にも問題となっている空き家に関しても、NPO 法人による空き家再生プロジェ



まちなか文化交流館(Bank)での研修



商店街にある銭湯を改装した飲食店

クトにより多くの空き家が活用されている。尾道市には文化財は多いがそれらが急斜面に位置しているという特性がある。そのことは生活のうえでは不便なことも多いと思うが、それを感じさせないほどの魅力あるまちになっているのは地域住民も尾道をよくしている点にあると考える。今回の研修旅行では文化財の活用の現状を現地で体感することができたので良い経験になった。

尾道の文化財にふれて：萩田雅己

今回8月6日から7日にかけて広島県尾道市に旅行にいった。1日目、私は小さい時に一度尾道市を訪れたことがあるが、その当時よりも人々の活気に満ちており、とても長いストリート商店街も多くの観光客で賑わっていた。旅行の初日は西井亨先生の案内の元、尾道市の文化財活用が行われているものを実際に見て回った。その際旧三井住友銀行尾道支店を活用した市民の文化活動や観光情報の発信拠点となる「まちなか文化交流館(愛称・BANK)」で尾道市の文化財活用の現状や課題などの話を聞いた。その話で感じたことは尾道市の人は文化財に対する意識が高く、自主的に記念館などの案内や尾道の歴史を学ぼうとする人が多いということだ。私の出身の大分県豊後大野市にも数多くの文化財が残っているが、20年間過ごしてきたなかで少なくとも私の周りで自主的に歴史について学ぶ人や観光ボランティアのようなことをする人はいなかったと思う。そのため一つの疑問が出てきた。尾道市は行政が何の関与もせず、もともと市民の文化財に対する意識が高かったのか、もしくは西井先生などの行政側の尽力あってこそ今の意識の高さに高められたのかということだ。後者であれば他の都市も文化財を市民と協力し活用するのは簡単であるが、前者の場合であると、他の都市は尾道市を参考にしても上手く機能しないかもしれないと思う。中間にあたる両者ともに高かった場合もあるかもしれないが、必ず初期の段階では

今よりも意識に差があったと思う。そこからどのようにして今のところまで持ち上げたのかがとても気になった。残念ながら旅行後に思い付いたため回答を得られないままとなってしまった。

その他にも市民に尾道市の歴史を学べる講座を開設しているのはとても良い活動だなと感じた。自分の町の事を知りたくとも何を見ればよいのか、どの情報を得ればよいのかと、ただでさえ長い歴史の本から情報を取捨選択するのは一般の人には労力と時間を必要とするからだ。ネット上で歴史の暗い側面は捉えられず戦争美化のようにされたものがある中、行政が正しい知識を市民に向けて広めることができる場というのは必要だと思う。一方で現在の課題に外国人観光客への対応、言語の問題があるという。コロナ後に尾道市に訪れる外国人観光客は右肩上がりに増えており、今後問題はさらに深刻化していくと感じた。そこで私は講座の中に外国語で話す練習や案内を作る講座があってもよいと思った。歴史も学べ、昨今必要とされている英語力も鍛えることのできる良い機会だと思う。実際に案内板を作ることも市民同士が複数集まってくること、案内板も個性が生み出せるうえに、文法などこれも英語学習に繋ぐことができると思ったからだ。総じてこの旅行は学びを得る良い機会になったと思う。

尾道市の観光を通じて学んだこと：小林永都

尾道市は、平安時代に備後大田荘公認の船津倉敷地、荘園米の積み出し港となって以来、繁栄をつづけた。江戸時代には北前船の寄港地で多くの物資が集まり石見銀山からの陸路での銀の輸入により街道も発展することとなった。江戸時代に大きな発展を遂げたことにより明治に入ると金融経済の発展により多くの銀行が建てられることとなった。尾道市は「箱庭的景観」が日本遺産としてストーリー認定されており、「村上海賊」、「北前船」では構成文化財が所在している。

今回の研修旅行を通じてまず感じたのは景観保護



まちなか交流館(Bank)の前で



旧住友銀行尾道支店と向酒店

などのために行政が積極的に介入している点である。3つの日本遺産があることからわかるように行政が中心となって、平成23年（2011）には文化財保存活用計画を策定したり、学校教育に日本遺産を使用したりと、文化遺産を守り伝えるための積極的に取り組んでいることが窺えた。尾道市内を歩いてみると現在は使われていない施設が市に買い取られ活用されている建物が多くみられた。旧三井住友銀行尾道支店もその一例である。これは、1895年に合議制を導入して行われた第一回住友重役会議（尾道会議）の舞台となった建造物で住友銀行の創業が決定された重要な場所である。現在の施設は1938年に建築された二代目の尾道支店ではあるものの、2019年に営業所が隣接地に移転されると建物を市が買い取り活用されることとなった。建物の外観は当時のまま使われており商店街の一角に立っていることもあり人目につく建物となっている。内部は少々改修されているものの当時の柱のつくりや窓などが見学でき現在に伝えている。建物自体は市民が自由に入ることができるまちなか交流館となっており、訪れたときは学生が描いた尾道の絵画が展示されていてそれを観覧している人の姿も見られた。初代尾道支店も現在見ることでその特徴的な外観であるモルタル造りも確認することができる建物となっている。また旧尾道銀行は現在博物館にリニューアルして開館しており、博物館内では当時使われていた銀行の金庫の扉などを見ることができるようになっている。

このように尾道市では積極的に文化財を市が保存し活用している。それらの文化財に市民が普段から触れることができるようになっていて、ほかの市町村には見られない特徴を感じることができた。尾道市の文化振興課文化財係の西井享先生にお話を伺うことができたが、尾道市はほかの多くの市町村が視察に来るほど文化財の活用に積極的である。特に私にとっては、文化財を保護する際に重要となる資金の調達方法を伺うことができる貴重な体験をすることができた研修旅行であった。

尾道を訪ねて：石橋初音

今回の尾道市での夏期研修旅行を通して、学んだことと考えたことを述べていきたい。

まず初日は西井先生に案内していただき商店街をはじめとした尾道市の町並みを見て、尾道市の文化財活用についてのお話を伺った。西井先生のお話の中で日本遺産による文化財の活用に力を入れており、地域が一体となって尾道の活性化やまちづくりを行っているという点が印象に残った。実際に商店街を歩いていて声をかけてこられた地域の人や訪れた林芙美子記念館をはじめとする様々な施設の方のお話を聞いても、

地域の住民が尾道に誇りや愛着を持っているという印象を強く受けた。更に尾道商業会議所記念館とあなごのねどこでは地域の小学校の児童たちが地域の魅力発信のために作成したパンフレットが貼られており、尾道の文化財活用の説明の中でも学校教育にも力を入れているというお話があり地域のアイデンティティや郷土愛の創出を図るうえではかなり理想的な活用が行われているように感じた。

2日目も尾道の町並みを散策した。その中で坂道の多い地形であったことが最も印象に残った。尾道は細い急斜面の道が多くガウディハウスや天寧寺、常称寺を見て回ったが、道自体は整備されているものの歩きづらく、またガウディハウスを見た際に地形に合わせて急斜面に建物が建てられており、西井先生のお話にもあったが保存活用が難しい現状もあるということが分かった。また坂道について、地域住民が生活道として利用するには不便であるとの印象を受けたので住みやすい街づくりと坂道の景観の保護をどのような折り合いをつけていくのが課題として挙げられると感じた。加えて尾道を訪れる観光客についても高齢者や障がい者など、実際に坂道を歩いて文化財を見に行くことが難しい人に対してどのように日本遺産としての魅力を伝えていくのかも視野に入れた活用が重要ではないかと考えた。2日目は多くの寺院を見に行ったが、西井先生のお話の中で資金面についても課題があると聞いた。例えば寺院の文化財活用をしていく上で行政側が全て金銭的負担をできるわけではなく、寺院の規模も小さいことから寺院側の金銭的負担が大きくなっているという現状があり、如何に尾道の文化財を所有者の負担が少なくなるように保護・活用していくかという課題もあるということが分かった。

今回の夏期研修旅行を通して、尾道は積極的な文化財活用と地域活性化を上手に行っている自治体であるという印象を受けたが、その中でも様々な課題点があるということが分かった。行政の視点から文化財の活



尾道 山側の風景

用を考えていく上で非常に学びの多い2日間であった。

情緒豊かな街、尾道：川村心之輔

今回、ゼミ旅行として訪れた広島県尾道市で感じたことや学んだこと、気づきになったことなどを述べていく。

新幹線と在来線を乗り継ぎ、尾道駅に降り立ち駅を出てすぐ潮の香りが鼻腔をくすぐった。駅の真正面には尾道水道があり特有の地形や向かいにある向島の造船所のドックを見て瀬戸内海に來たのだという実感が湧いた。尾道はこの尾道水道を軸に昔から海運や商業で栄えた町であった。その事実を確かめるように尾道水道を感じることができた。

ホテルを出て尾道市街に行くことになった。尾道市は戦災があまりなく、戦前の建物も多く残っている。商店街にはモルタルで飾られた看板建築や木造の建築なども多く見られ昭和の影を残す街並みが見られた。今回訪れたまちなか文化交流館 Bank（三井住友銀行尾道支店）もそれらの一つで、昭和モダニズムを感じさせる建物で市の重要文化財にも指定されている。私たちはこの建物の中で尾道市文化振興課の西井亨先生のお話を聞くことができた。この建物は現在、尾道市民の憩いの場であり交流スペースとしても活用されているとのことだった。現に私たちが話を伺っている最中にも夏場で外気温が高いこともあったからか、多くの観光客や地元の人が入って休んだり、談笑をしたり、建築を見ている姿が見受けられた。まさに文化財の活用の実態であるといえるものを見ることができた。

2日目は千光寺や浄土寺といった寺院を訪れた。千光寺へはロープウェイで山頂まで登った。山頂からは眼下に尾道市街、その向こうに尾道水道や瀬戸内の島々がみられ、尾道が箱庭的都市と言われる所以をこの目で見ることができた。浄土寺は瀬戸内の海沿いからまっすぐに境内までの道が伸びており、江ノ島のような雰囲気を感じた。江ノ島と大きく異なるところは



街歩きの様子

海が瀬戸内海であり島々に囲まれていてもっと閉鎖的であり空間的に山と海を感じることができるところであると感じた。

浄土寺は境内地に多くの国宝、重要文化財等が所在している。宝物殿には聖徳太子のゆかりのものなどが展示されていた。尾道は土着の文化も盛んに発展しており、仏教信仰や祭祀など民俗学的にも価値のあるものが多く残っていることもわかった。信仰や祭祀の民俗的要素、山頂に建てられた寺院、眼下に広がる瀬戸内海と島々、それら全体がまさに箱庭を形成しているのだと思った。個人的に山と海に挟まれ街全体も活気のある尾道のような箱庭的都市の場所には初めて訪れたためとても新しい感覚であった。

尾道は、活用という側面から見たときに行政や住民、観光客など街全体が尾道という街を盛り上げ、昇華させようという雰囲気が見られた。コロナの収束などにより観光客の増加もこれから見込まれ、商店街内の商業施設もさらに発展することだろう。一つの文化遺産ではなく尾道という街全体を一つの遺産として押し出すことによって全てを包含して守り伝えることが可能なのであろう。文化遺産の活用、保存の実態、行政からのアプローチ、全てを通してその具体例を身をもって感じる事ができる有意義なゼミ旅行であったし、私自身尾道という街に来ることができて、尾道という街を知ることができてよかったと感じた。



尾道商業会議所 正面

Ⅲ. 文化財科学（北野）ゼミの夏期研修旅行の概要

2023. 9. 11～9. 12

はじめに

担当教員：北野 信彦

文化財科学ゼミでは、ゼミ生が個人々人として興味を持つ建築史や美術史、伝統技術の諸分野におけるさまざまな有形・無形の文化遺産の調査・保存修復・活用に関する卒業研究として、主に保存修復科学的(文化財科学・保存科学・修復技術)な手法を用いて取り組む方法が身に付けられるような教育を心がけている。今年度の北野ゼミの旅行は、9月11日(月)～9月12日(火)の1泊2日の日程で13名のゼミ生、さらに本学大学院の北野ゼミ(文化財科学ゼミ)院生も合流し、合計20名で金沢市内の文化遺産関連施設を訪れた。今年のテーマは「金沢の文化財保存修復科学の現場を巡る」である。

旅行日程は以下の通りである。まず初日の9月11日(月)は、京都駅もしくは新大阪駅に集合して全員でJR特急サンダーバード5号を利用して金沢駅へ移動した。近江町市場で昼食後、一旦荷物を香林坊の宿泊ホテルに預け、徒歩にて伝統的建造物群である長町武家屋敷街を実見しながら金沢市職人大学校へ移動し、事務長の淵吉忠氏より職人大学校における伝統的建造物の保存修復実習及び講義内容の概要説明を受けたのち、木工事・左官・装こう技術などの各種実習風景を見学した。その後、金沢市立安江金箔工芸館(金沢箔技術振興研究所)に移動し、川上明孝館長から2021年にユネスコの無形文化遺産に登録された「伝統建築工匠の技」17団体の1つである伝統縁付箔の歴史と技術に関する講義受講(金沢の伝統縁付箔は日光東照宮の修理にも使われるなど、文化財修復に欠かせない材料)→川上館長より安江金箔工芸館、展示施設を見学しながら伝統金箔製作の解説を受けた。その日の夜は地元の加賀料理を堪能しつつ今後の学びに関する意見交換を活発に行った。

2日目の9月12日(火)は、兼六園の近くに所在する石川県立美術館附属施設である石川県文化財保存修復工房において日本画修復の現場作業を見学した。この修復工房では、実際の絵画修理が行われており、装こう(日本画修理)技術者で石川県文化財保存修復協会専務理事の廣部茂紀氏から、和紙・古糊などの修復材料と各種道具、実際の作業風景をまじかで詳しく解説いただくことができた。

その後、徒歩にて成巽閣に移動し、御殿内部の絵画・



石川県文化財保存修復工房における日本絵画修復現場作業の見学風景



川上館長より金沢伝統箔製作の説明と安江金箔工芸館の展示見学風景



川上館長より金沢伝統箔製作の説明と安江金箔工芸館の展示見学風景

色壁・ガラス板絵などを見学しつつ北野が概要の説明を行った。このエリアは 2020 年に東京から国立工芸館が移転するなど、多くの博物館施設がある文化エリアである。成巽閣の見学後、グループに分かれて兼六園・復元整備された金沢城・石川県立美術館・旧金澤陸軍兵器支廠兵器庫の赤レンガ近代建築を活用した加賀本多博物館・石川県立歴史博物館などの見学を行い自由解散とした。

金沢は、全国でも珍しく第二次世界大戦で空襲が無かったため古い建築や伝統工芸がよく残る町である。京都と対比される文化都市の金沢であるが、実際の町並みと文化財修理に関する現場をゆっくり見学できた。なお研修旅行自体はこの 2 日間の行程であったが、金沢周辺には文化遺産に関係する施設も多い。そのため個々人の責任の下、ゼミ生諸君のなかにはもう 1 泊して自分が特に関心のある施設などの見学を実施して全員無事に研修旅行を終了させることができた。個々人のゼミ生諸君らの学んだ内容はそれぞれのレポートにまとめてもらっているが、各人充実した研修旅行となったようである。

ゼミ旅行レポート：伊藤鴻司

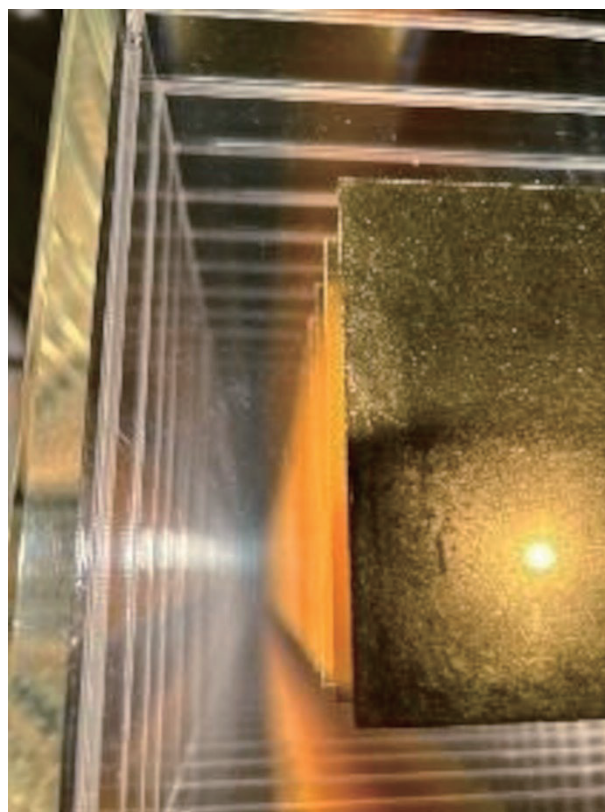
今回のゼミ旅行では、京都とは異なる独自の文化を形成してきた金沢という町について、詳しく知ることができた。また、様々な視点からその文化をどう守り伝えていくか、現代にどう生かすことができるのかということが考えられていると、整備された街並みや今回見て回った施設から感じ取ることができた。

特に私が上記のことを感じたのは、金沢市安江金箔工芸館だった。金箔は金沢を代表する伝統工芸の一つであり、文化の保存が図られるとともに、現代でも様々な活用方法が模索されている。

金箔には大きく分けて 2 つの作業工程があり、そのどちらもが文化保存の担い手である職人たちの手によるものである。私が今回興味深く感じたのは、「箔屋」とよばれる金箔を 1/10000 にまで引き延ばす職人である。この職人が行う工程では、1/1000 にまで引き延ばされた金箔を目利きで重量が同じになるように複数枚に切り分け、それらを組み合わせたうえで箔打ち紙に挟んで叩いていくが、箔職人は「5 割が紙」といわれるほどこの紙が重要となってくる。この紙は雁皮と特殊な土を混入して漉かれた特殊紙であり、箔打ち職人はこの和紙を灰汁や柿渋・卵を原料とした溶液に浸し、乾かした後均一の厚みになるよう叩く作業を何度も繰り返して上質な箔打ち紙を作り出す。箔打ち紙は金箔をたたきのばす際に発生する熱や衝撃に耐え、金箔の表面を滑らかにする効果を持つため、金箔のできを左右するといっても過言ではない。しかし下地紙となる

和紙は、名塩などの限られた地域でしか漉かれておらず、この担い手も少なくなっているのが現状である。その理由の一つとして挙げられるのは、やはり需要の低下である。金箔の需要が少なくなるにつれ、箔打ち紙の需要が減少するのは当然のことであり、金箔に直接携わる職人のみならず、製造に関わる道具を作る職人にも目を向ける必要がある。

金沢では、金沢金箔伝統技術保存会によってこれらの職人の後継者を育てる取り組みも実施されている。箔打ち紙に関しては、選定保存技術に選定されたのち後継者確保に奔走した歴史がある。また同会では、需要増加に向けた商品開発なども行われており、古来より伝わる漆器や文化財の修復以外にも、香水や酒・家具など様々な場所にそのニーズを見出している。また、金沢の文化の人づくり奨励金として、金沢市から伝統産業に携わる後継者へ補助金が交付されている。それ以外にも文化イベントや芸術文化振興を目的とする活動に県・市ともに助成金を出すなど、町全体から伝統産業を存続させようという意思が感じられ、実際に数々の取り組みがなされているのは文化事業に対してとても先進的だと感じた。文化を継承していくには、それに携わる職人の保護が可及的速やかに求められる。特に京都や金沢といった守り伝えるべき伝統文化が集中している地域では、より一層細部へのサポートが必要だと考えられる。



安江金箔工芸館展示

金沢におけるゼミ旅行で学んだこと - 成巽閣 - ：小谷彩翔

夏季休暇期間に行われたゼミ旅行について、私は特に「成巽閣」という建造物の彩色に注目して見学を行った。そのため、成巽閣について実際に見学することで学ぶことができた点を述べていくこととする。

成巽閣は、石川県金沢市の兼六園付近に位置する建造物である。概要としては、江戸時代末期（1863）に前田家13代齊泰が12代奥方である眞龍院（鷹司隆子）のために造営した奥方御殿である。巽御殿と呼ばれ、華やかな色彩や意匠を凝らした装飾が特徴的となっている。

成巽閣の中でも特に私が注目した点は、階上にある数寄屋風書院造についてである。各部屋におけるさまざまな色壁が印象的であるが、特に「群青の間」と「群青所見の間」がよく知られている。この点について、行く前にこの場所の写真を見た際はこの二か所のみこのような鮮やかな空間になっていると認識していた。しかし、実際に行って直接見ると確かにこれらの部屋が特に鮮やかなものとなっただけでなく、ここに至るまでも緑や朱を使用した部屋があったり床の間の木の材質を柱一本ごとに違うものに変えていたり引手の部分にも緑を使用しているなど細かいこだわりについて知ることができた。

また成巽閣のなかにおいてあった案内資料によると、実際に階上にある顔料は似た色であったとしても多岐にわたる材料が使用されていることが確認されている。その中でも、群青の間等に使用されているウルトラマリンブルーは日本に輸入された人工ウルトラマリンの中でも初期のものだと考えられており、日本において古くから使用されている群青よりも明るい色調を持っていると感じられた。この点について、最も格式の高い空間に古来より高貴な色とされている紫や基本的に高価な顔料である青を壁一面に使用している点について当時の前田家の経済力とこだわりの高さを強く実感した。

もう一つ学んだ点としては、「ギヤマン」が挙げられる。ギヤマンとはオランダ渡来のガラス絵で、成巽閣では花鳥焼付のものがはめ込まれている。私は、そもそもこのような技術があることについて初めて学んだが、成巽閣だけでなく近隣の尾山神社にもおなじくギヤマンを使用した建造物が見られた。尾山神社は前田家と深い関わりがあるもののギヤマンと前田家との関わりについては今回わからなかったため、今後追及していく必要があると考える。

成巽閣の他に金沢職人大学校や安井金箔工芸館、石川県文化財保存修復工房などに行き文化財の修復について多くのことについて学ぶことができたが、実際に

モノを見学することによって過去の人々の彩色について写真ではわからない色調や細かい装飾について実際に見ることができたことが最も自身の学びに繋がったと考える。

参考文献

- ・江本義理「成巽閣の色壁」『保存科学（復刻版）第9号』1972年
- ・金沢 加賀前田家の奥方御殿 成巽閣（seasonkaku.com）（最終閲覧日 2023/10/19）



成巽閣玄関（本人撮影、2023/9/12）

金沢ゼミ旅行で学んだこと：笹山和寛

授業の一環として金沢の職人大学校や文化財修復工房、金箔工芸館を見学させてもらった。他にも成巽閣や武家屋敷街道を見学した。今回は金箔工芸館で学んだ金箔についてまとめていきたいと思う。

金沢の箔打ちは、加賀藩祖前田利家が七尾で金箔を金沢で銀箔を打つように命じていることから16世紀末までに始まっていたことが確認できる。江戸時代になると幕府が箔座を配置し、諸藩の金銀箔の製造販売を禁止したため、18世紀末以降は途絶えてしまった。しかし、19世紀になると箔打ちが再開される。金沢城の再建にあたり京都から職人を呼び金箔を打たせたことがきっかけとなり、金沢の職人は箔打ちの技術を習得し御用箔を打たせたが満足できず、金銀箔の製造販売の権利を求めて運動を起こした。販売権は得られた

が製造権は得られなかった。それでも箔を打ち続け幕末に製造権を得ることができた。これを機に発展した金箔は明治以降に産業としてより発展する。幕府の金銀座が廃止すると江戸の箔打ちはすぐに衰退し、これに代わり金沢箔の生産が増加し代表する産物になる。大正初期には電動箔打機が開発され生産性増加と、ドイツ箔の穴を埋めるように輸出にも貢献した。昭和に入ると、戦争の拡大とともに諸種の制限令が出され、箔業界は壊滅状態に陥る。戦後は、経済成長を機に仏壇仏具に使われる金箔の需要が拡大し、好況が続いた。バブル崩壊後、産業に直撃したが、食品や化粧品、身の回りの小物、インテリアへの応用など新たな領域に拡大を図り現在に至っている。現在の箔打ち技術は京都から学んだものであるが、戦後に京都の箔打ちは途絶えてしまったので、伝統的な箔打ちを継承しているのは金沢だけになっている。また、ここまで箔打ちが継承された理由は犀川や浅野川の水質が箔打ち紙の仕込みに適していたことや、加賀藩の工芸政策によってモノづくりの伝統が根付き、その精神が箔の製造にも活かされているからである。

金箔を作る上でまず重要となるのが金を箔にしているために箔打ち紙等の仕込みが必要になる。紙の出来具合が金箔の良し悪しを決める。箔作りは紙作りと言われるくらいである。縁付金箔は何度もたたいて伸ばし一枚一枚水準の大きさに合わせて切っていく伝統的なものだが、断切金箔はカーボン紙という新種の紙を使うことにより製造工程の省力化したものである。生産効率を考えると断切金箔が優勢だが、伝統や歴史を守っていくためにはなくてはならないのが縁付金箔である。現在では食品や様々なものに使用され経済面では観光客による消費などが挙げられる。しかし生産面では少子高齢化や都会流出の問題から職人、後継者が不足している。この伝統産業をなくさないためにもこの業界の魅力をいうものを発信していかなければならないと感じた。



金箔工芸館前の写真(撮影：笹山)

今回の金沢ゼミ旅行で金沢金箔について歴史と現状について簡単にまとめた。伝統工芸産業の現状を知りたい機会になった。また、金箔作りの作業工程の大変さも学ぶことができた。このことを念頭に置きながら今後自分の研究にも取り組んでいきたい。

金沢城鉛瓦について：関元隆明

私は石川県金沢市へのゼミ旅行に際して、金沢を代表する文化財建造物である金沢城の屋根に葺かれた鉛瓦に注目しその歴史及び現在の課題について考えた。

金沢城は天正 11(1583)年に前田利家が城主となり、その直後から本格的な城づくりが始められた。築城後火災による御殿、櫓諸門の焼失が幾度かあったものの、その度に再建がなされてきた。しかし明治 14(1881)年の火災により二ノ丸御殿や五十間櫓などの城内の主要な建物のほぼ全てが焼失するに至り、現在は石川門、三十間長屋、鶴丸倉庫の三件の建造物が残るのみである。これら金沢城に現存する建造物のうち鶴丸倉庫を除く二件は鉛を主成分とした鉛瓦を屋根に葺いている。また近年に復原された建造物についても、古例に倣って鉛瓦を用いて屋根を葺く。金沢城で鉛瓦を使用されるようになったのは寛文 5(1665)年のこととされている(注1)。鉛を瓦に用いた理由には諸説あり、鉛は鉄砲の弾丸のもととなるため有事に備えて屋根材に用いて保管した、幕府の貨幣鑄造の統制令の影響によって自藩で貨幣に用いる予定であった鉛が余ったため屋根に転用した、などの説が唱えられているがいずれも根拠に乏しく俗説の域を脱しえない。

鉛瓦は雪を冠したような白く輝く美しい姿が評価されてきた。鉛が白く見えるのは雨水に含まれる二酸化炭素と鉛が反応してその表面が塩基性炭酸鉛へと変質するためといわれ、施工当初は黒色から深い鼠色に近い色を呈しているものが、経年によって次第に白色へと変色する。今回のゼミ旅行では屋根への接近が可能であった菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓(2001 復元)、河北門(2010 年復元)について、鉛瓦の目視観察を行った。すると遠方でみれば真っ白に輝く鉛瓦も、接近してみるとその表面には雨水が流れ落ちた線が残り黒く変色した箇所が多数確認された。他にも、鉛が溶けだしたり穴が空く事例が確認されている。実際に金沢城を訪れた 2023 年 9 月 12 日の時点で三十間長屋では破損した鉛瓦の葺き替え工事を実施していた。現場に設置された説明板によると、屋根の葺き替えは昭和 44(1969)年以来約 50 年ぶりのことで、鉛の溶出や表面の汚れはいずれも酸性雨の影響だと考えられている(注2)。さらに、金沢城では屋根の鉛瓦の鉛成分が溶けだし地面に滴れ落ちることによって、土壤が汚染され、低地性の植物に代わって鉱山性の植物である「ヘビノ

ネゴザ」が生育するようになったことが報告されている（注2）。酸性雨による影響は鉛瓦の劣化を促進するだけでなく、文化財の周囲ではぐくまれる生態系をも変化させているのだ。

以上のように鉛瓦は酸化することによって美しい白色へと変色するが、強い酸を含む近年の雨水はむしろ鉛瓦に悪影響を及ぼしていることを如実に感じた。観察を行った建物はいずれも近年復元されたもので、竣工後わずか 10～20 年ほどしか経過していない。しかしそれにも関わらず複数の個所で劣化が確認され、今後何らかの対策をとる必要があると思った。近年、金沢城ではかつて失われた様々な建造物の復元を試みており、その集大成として将来的には二ノ丸御殿の復元を目指している。今回のゼミ旅行での観察を通じて、復元事業では伝統材料を活かしつつ、大気汚染の状況等を考慮して、後世に残る最良の方法を模索する必要があると感じた。

注

1、金沢城公園公式 HP

<https://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/>

最終閲覧日 2023 年 10 月 27 日

2、本浄高治、中西孝 1986「金沢城の鉛瓦と蛇の寝御座-その秘めたる謎をめぐって」『化学同人（京都）』41 号



金沢城菱櫓鉛瓦近景（2023 年 9 月 12 日筆者撮影）
至近距離で観察すると鉛が溶出して這った跡とみられるくぼみや汚れやが確認された。

金沢市立安江金箔工芸館を訪れて：竹中彬子

2023 年 9 月 11 日から 13 日にかけて行われたゼミ旅行の初日に金沢市立安江金箔工芸館を訪れた。金沢市立安江金箔工芸館は安江孝明氏によって 1974 年に設

立された金箔に特化した博物館である。1985 年に金沢市に寄贈された後、2010 年金沢市東山に現在の館を新築し移転した。

金沢市立安江工芸館にて金沢金箔の歴史や金箔の用途、製造工程、道具について学んだ。16 世紀末、加賀藩祖前田利家の命により七尾で金箔が、金沢では銀箔が打たれるようになったが、江戸幕府によって箔座が設置されることとなり 18 世紀以降は製造が途絶えた。19 世紀、火事に見舞われた金沢城の再建に伴い京都から職人が訪れたことにより、金沢の職人は箔打ちの技術を学び、箔打ちが再開された。当初は御用箔のみを打っていたが金・銀箔の販売権を獲得し、幕末には製造権も勝ち取った。明治末には金箔は金沢を代表する産業となった。電動箔打機の導入で生産量は増加したものの、第二時世界大戦時の制限令によって金箔業界は壊滅状態となる。戦後は仏壇仏具に用いられるようになり、バブル期には打撃を受けるも現在は仏壇仏具以外の場所でも用いられるようになっていることを、金沢市立安江工芸館を訪れた際にいただいた説明と見学から学んだ。

金沢市立安江工芸館を見学して、金箔には伝統的な方法で製造された縁付金箔とカーボン紙を用いた断切金箔があることを学んだ。縁付金箔は紙仕込みと澄工程、箔工程の 3 つの工程によって製造されている。紙仕込みの工程では澄打紙と箔打紙を澄工程と箔工程用に加工する。澄工程では金に銀や銅を少量入れた金合金を澄屋が 6 cm 角に裁断し、ハトロ紙に 1 枚ずつ挟んで機械で打つ。これを繰り返して、澄打紙にまた 1 枚ずつ挟んで 800 枚にまとめて革で包み打つ。またこれを繰り返して、艶消しに仕上げて 1 ミクロンの厚さにする。箔工程では雁皮を原料とした箔打紙を用いて打っていく。この箔打紙は名塩で製造された雁皮紙を使用している。見学の際に名塩紙以外の紙も箔打紙として使用されているかという質問をしたところ、金沢近くの二俣という地域で製造された紙も使用されていることを学んだ。打ち終わると三極紙を使用した広物帳に移し替えて保管した後、革板の上に移して規格に裁断する。以上の工程を経て縁付金箔は製造されている。

縁付金箔の製造工程の一つである紙仕込みは 6 ヶ月前後の時間を要する 1。一方で断切金箔の製造に用いられるカーボン紙は長くても 1 週間程度 2 で製造が可能である。また、断切金箔は縁付金箔とは異なり、仕上げ時にまとめて裁断するという工程の違いがあることを学んだ。

縁付金箔は金沢の金箔のうち 20%以下となっており、断切金箔が 80%を占めている。その要因として、断切金箔は縁付金箔よりも製造にかかる時間が短く手間も少ないことが挙げられる。しかし、縁付金箔は伝統工

芸品や文化財の保存修復に用いられる欠かせないものであること、現在縁付金箔製造に携わる職人数は減少しており、その対策として後継者育成のための事業も行われていることを学んだ。

注

1、加藤明「金箔箔 断切製箔技術調査報告—断切金箔職人から技と系譜の聴き取り調査—」『平成 23 年度 金箔箔技術振興研究所受託調査』p. p. 1 2011 年

https://www.kanazawahaku-giken.jp/pdf/jigyoku23_a_kato.pdf

2、注 1 p. p. 1 より



金箔箔工芸館外観

石川ゼミ旅行：中尾有希

私たちは、9 月 11 日～13 日に石川県金箔箔市にゼミ旅行として訪れた。初日に金箔箔市立安江金箔箔工芸館に訪れ、館長の川上さんから金箔箔について歴史を聞き、施設を案内していただくことができた。

金箔箔の箔打ちは、江戸時代になり幕府が箔座を設置して諸藩の金銀箔の製造販売を禁止し途絶えたが、19 世紀初頭に火事で焼けた金箔箔城の再建にあたり藩が京都から職人を呼んで金箔箔を打たせたことがきっかけとなり、金箔箔の職人たちは箔打ちの技術を習得し、藩も彼らに御用箔を打たせ、また職人たちが製造し販売する権利を求めて運動を起こし、幕末には製造権を勝ち取ったと聞くことができた。このことから、金箔箔の人々は自分たちで考え問題意識をもって行動してきて自分

たちの伝統を築き上げてきたのだと感じた。また、このことは初日に訪れた金箔箔職人大学校の見学時にも感じることができた。金箔箔市では非戦災都市ということからも考えられるように武家文化の城下町という伝統的環境や伝統文化が今もなお残っている。生活環境の近代化や機械化による技法の衰退や後継者不足などの厳しい状況は、文化財保存修復について学んでいく中でよく挙げられる課題でもあるが、金箔箔職人大学校は「歴史に責任を持つ」という考えから「伝統的で高度な職人の技の伝承と後継者の育成、市民の認識向上」を目的として、9 業種 9 組合の寄付と金箔箔市による出資で社団法人金箔箔職人大学校が設立され、県や国の補助金ではなく市の予算で運営がされていることを学び、改めて金箔箔市が自分たちの守り伝えていくべきものと考え、どうすべきかを自分事として考えてきた結果なのだと感じ、これは文化遺産学専攻として学んでいく私にとって「歴史に責任を持つ」ということの意味を改めて考え直すきっかけにもなった。

金箔箔市立安江金箔箔工芸館での施設案内では、金箔箔ができる過程を丁寧に説明していただき、一部の展示物についても解説していただいた。その中で、沈金と蒔絵についての違いについて実物の作品を見ながら解説していただいたのが印象的で、もっと作品を比較してみていくことで、それぞれの方法を用いることの特徴を学んでいきたい。また、お話の中で印象に残っているのが、金箔箔に関わる方法は 1 つではないということである。直接、職人になることはできなくても、金箔箔を用いているものを購入するなどの積極的な消費活動で間接的に職人の支援につながると学び、自分にできることを考えた。そして今井金箔箔広坂店でバッジ金箔箔貼り体験があることを知り、興味もあったため体験を行った。このように金箔箔市の文化財やその修復材料や技術に対しての考え方というのは私にとってすごく刺激的で自分ごととして考えることが大事だと学んだ。



今井金箔箔広坂店金箔箔貼り体験（撮影日 2023/09/12、

撮影 中尾）

ゼミ旅行記録～石川・金沢～：中村幸世

今年度、私が所属する北野ゼミがゼミ旅行で訪問した先は石川県金沢市の地だった。我々北野ゼミのここ数年の定番となっている金沢は加賀藩の藩祖・前田利家公に端を発し、現在は加賀百万石の栄華を極めた地として日本全国のみならず海外からもその名を知られているほどだ。しかし、いざ金沢とはどんな街なのかを伝える或いは想像せよといわれると京都・祇園の花見小路通りに似ている東茶屋街の町並みや金沢城ならびに兼六園のような観光スポットに目が行きがちになるのではないだろうか。実のところ大学に入学する前まで、つまり故郷がお隣の富山県それも高速道路を使えば1時間もかからない比較的近い場所に住んでいたので度々遊びで石川の地に訪れる機会が多く、ある程度馴染みのある土地であったが、今回のゼミ旅行つまり文化遺産専攻の視点で訪れる面において新鮮に映った。

ちょっと前置きが長くなったが、中身に触れていこうと思う。初日の9月11日は9月といえども残暑どころか猛暑が厳しく、追い打ちをかけるかの如く日差しが照りつける晴天だった。初めに訪れたのは公益社団法人金沢職人大学校、ここはまさしく文化財科学を学ぶ身として外せない金沢に伝わる伝統工芸技術を次代に受け継ぐプロを育てる養成する金沢市によって設立された学校になる。若干の写真を載せたいところだが利用許諾が下りていないため今回は見送りさせていただくが、畳・海鼠壁・瓦などの職人技が光るモノを実物サイズで鍛錬している工房の雰囲気は重厚感のあるものであった。また先程述べた、‘市によって’の部分には国及び県の助成に頼らずに自らの力で守り伝えるという誇りも含まれている（職人学校の方も説明で同じようなことを言っていたような否か）のもこの目で確認できた。

次に金沢周遊バスに乗り、所が変わり金沢市立安江金箔工芸館を訪問。施設名から推察される通り、金沢の代名詞の1つである金箔についての歴史を施設館長さんの話を聞いた後、展示室にて紹介されている製造方法の紹介コーナーならびに金箔を用いた美術・工芸作品の鑑賞を行い、金沢に伝わる‘黄金の伝統’に触れてきた。アートの都・金沢を存分に学び初日はこれにて終了、その夜はコロナ禍でゼミ旅行に行けなかったため今回私たちに同行されていた院生の方々も交えての食事会にて交流会を開き一日を終えた。

翌日、朝9時より出発し石川県文化財保存修復工房を訪れた。まさに文化財保存・科学の現場とあって独特の緊張感が漂っていたが、浅学な我々にも親切に工房内を案内していただき、そして実際に修復作業がされている部屋にも通され目と鼻の先で真剣な面持ち

で取り組まれている様子であった。丁度その中で偶然富山県にゆかりのある石黒信由に関する書物を扱っていたのは何故だか嬉しさを覚えた。その後、兼六園の敷地にある成巽閣を訪れ加賀藩主の気分になって散策し昼食後、各々が関心のある場所へ赴き、私は国立工芸館および石川県立歴史博物館そして金沢城を散策して金沢でのゼミ旅行は終了。思い返して書いてみるとかなり詰め込んだスケジュールだとひしひしと感じつつ、石川の歴史とアートを存分に味わい学びを深めたものであったといえる。



国立工芸館 外観（撮影 中村）

ゼミ旅行研修レポート：平田凌大

今回のゼミ旅行は金沢へ足を運んだ。ゼミ旅行に行くにあたり事前学習では、金沢の伝統産業である金箔について調べた上でゼミ旅行に参加した。具体的には金箔の作り方や種類、成分などを調べた。今回の見学場所の一つに金沢市立安江金箔工芸館（工芸館3階に金箔技術振興研究所も併設）という場所を見学したのでこちらで学んだことを、事前学習を踏まえながらまとめることにする。

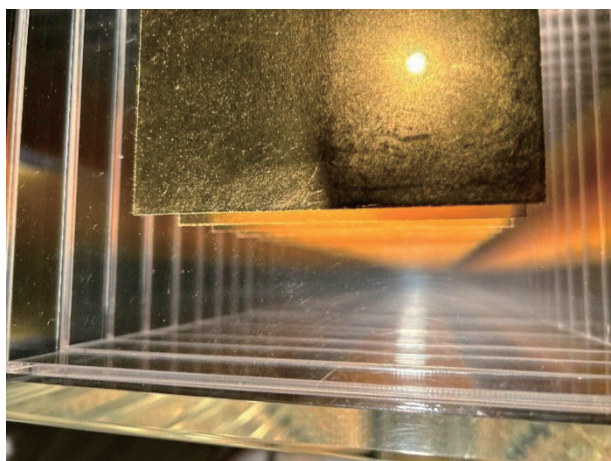
そもそも金箔とは何かということであるが、金を約0.1 μm (1/10000 mm) まで薄く延ばした“箔”のことである。金以外にも銅や銀も含まれている。建物・工芸品・仏像などさまざまなものの彩色に用いられており、金箔は古代エジプトやギリシア・ローマなどでも使用例があるように世界でも古くから用いている。日本でも建物や仏像の色彩などに用いられている。また金箔についての詳細な歴史は不明な点があるが、東大寺の大仏に金箔が押されていたことが文献に残っていることや、キトラ古墳の石室内天井に描かれる星座が金箔で彩色されていたことなどその歴史はかなり古いことが分かる。

ではなぜ金沢で金箔の生産が盛んになったのかということであるが、これについては安江工芸館にて館長の川上さんより教えていただいた。結論として、金沢で金箔の生産が盛んになった理由は詳しくは分かっ

ていない。しかし、文献などから 16 世紀末までに金箔の生産が始まっていたことが分かっている。ただ、江戸時代に入ると経済の状況により金銀の使用の統制が行われるようになった。さらに金銀の使用の統制から金箔の生産に関しても統制が入るようになった。それが「箔打ち禁止令」と呼ばれるもので金箔の生産に関しては、幕府が設置した“箔座”という機関でしか生産されなくなったそうだ。その後、箔打ちが再開されたのは 19 世紀に入ってからだそうだ。きっかけは火事により焼失してしまった金沢城の再建にあたって、京都から職人を招き金箔を打たせたことであると言われる。その後金沢の職人も箔打ちの技術を習得し発展していった結果、現在では「伝統建築工匠の技」としてユネスコの無形文化遺産に指定される伝統産業になったそうだ。

このように現在まで続く箔打ちの、最大の問題点を川上さんから教えていただいた。それは担い手が非常に少ないということだ。今現役で職人をしている方々の平均年齢は 60 歳後半となっており、箔打ち自体の存在が危うくなっている。さらに、追い打ちをかけるように現代では金箔があまり売れないということもあるようだ。私たちは文化遺産を守り伝えることを主として日々勉強をしているが、守り伝えたいと思っている対象の大元自体が消えてしまうということは何れだけ技術が進歩しても守り伝えることができない。今後この問題は文化遺産を守り伝えようとする者全員が取り組まなければならないということが非常によく理解できた。

今回金沢市立安江工芸館を見学して、金箔の歴史や現状について詳しく知ることができた。金沢に対する印象として挙げられる金箔であるが、未だ不明な点が多くあることや現在の金箔生産の状況が危ういということがよく分かった。私の先行研究の一つとして非常良い学びになった。



工芸館内に展示されている金箔を 100 枚重ねた展示

ゼミ旅行レポート：松井 剛

9 月 11 日から 13 日にかけて行われた金沢ゼミ旅行の初日、我々は石川県文化財保存修復工房を訪れた。この工房は 1997 年に石川県立美術館の附属施設として開設され、2016 年の春には旧第九師団長官舎として使用されていた建物に隣接して新設オープンされた地方自治体としては初めての文化財修復工房である。

最初に、石川県文化財保存修復工房が修復を行なったいくつかの作品の修理方法について、ディスプレイを用いて一つ一つ細かく解説をしていただいた。作品によって劣化の仕方や種類、進行の程度もさまざまであり、それぞれの劣化の症状に合った適切な処理を施していくことが重要であるということ学ぶことができた。またそれらの修理には、豊富な知識と経験により裏付けされた適切な処理方法と高い技術力も同時に必要である。しかし、様々な技術やたくさんの薬品を用いても、最終処置をするのは人である。やはり職人の技というものが文化財を修復する上でより重要だと感じた。

次は実際に修復作業室を案内していただいた。修復室には大きなガラス窓が取り付けられており、これほど大きなガラス窓のある見学室は石川県文化財保存修復工房が初めてであるらしく、確かに中の作業の様子を非常に快適に見ることができた。ガラスを隔てての見学だけかと思っていたのだが、扉を開けて中の修復の様子まで間近で見学させていただいた。修理を行っている最中の資料についての詳しいお話を修復技術者の方から直接伺うことができた。また、古糊作りのお話が特に興味深かった。畳一畳ほどのスペースのあるコンクリート打ちっばなしの小さな部屋の壁一面に、古糊が入った甕がズラリと並んでいた。古糊とは掛け軸の裏打ちにのみ使用される特殊な糊であり、これを作るのには大変な時間を要する。一年で最も寒い時期とされる「大寒」の日に、炊いた糊を甕に入れ、水を張って封をして一年寝かしておく。そして次の年の大寒の日には、発生したカビを取り除きまた水を張る。このような毎年の手入れを繰り返して 10 年程でやっと完成する古糊だが、その年の気候や環境などによって出来は様々らしく、使えないものもあるそうだ。そのため古糊は常に作り続けているようである。この大変な手間をかけて精製した古糊を用いた裏打ちもまた、たくさんの時間と手間を費やす。糊の繊維と和紙の繊維を接着させるために、刷毛で裏打ち紙をたくさん叩く必要があるため、修復室内にはずっと刷毛で紙を叩く規則的な音が響き、眠気を誘うそうだ。

今回の石川県文化財保存修復工房の見学で、文化財の修理は 1 日や 2 日でなし得ない大変地道な仕事だと改めて感じた。これまで机上の学びだけに留まっていたのが、今回修復の現場を間近で見学をさせていただき、実際に修復を行なっている技術者の方に直接お話を伺い、人とモノが向き合う現場に触れることができたのは、またと無い機会となった。これからはより実践的に文化財保存の学びを深めていきたいと思う。



石川県文化財保存修復工房 2023 年 9 月 11 日 松井撮影

成巽閣 書見の間の色壁：松尾野々花

ゼミ旅行で金沢市職人大学校や石川県文化財保存修復工房など文化財科学に関する様々な場所で見学を行った。なかでも、成巽閣での見学が最も印象に残っている。私は卒業論文で建築物のベンガラ塗装彩色の研究に組みみたいと考えている。そのため、高価な顔料が多く塗装されている成巽閣での見学は、多くの学びと気づきを得た有意義な時間であった。

成巽閣は文久3年（1863）に兼六園に建築され、昭和25年（1950）に重要文化財に指定された。前田利家を祖先とする十三代前田家当主の齊泰が十二代奥方の母のために成巽閣を建築した。金沢城から見て巽の方角（東南）にあり、且つ京都の鷹司家が辰巳殿と呼ばれていたことから、巽御殿と呼ばれた。12代前田家当主の齊廣が遺した竹沢御殿の謁見の間と鮎の廊下を移築し、西洋からもたらされた江戸時代のガラス製品でギヤマンと呼ばれる素材や高価な顔料が融合した成巽閣は、歴代の天皇や宮をお迎えする役目も果たした歴史ある建築物である。花鳥の欄間彫刻を施した謁見の間や蛇腹と目地に西欧から輸入されたウルトラマリンブルーと呼ばれる群青色の顔料を豊富に使用した群青の間が成巽閣の見どころであり、加賀百万石の持つ高い技術力と文化力に思わず圧倒される。二階の濃い群青色を発するウルトラマリンブルーであしらわれた群青の間をさらに奥へと進むと、書見の間が現れる。そ

こで私は紫色に塗装された壁に心奪われた。壁をよく目視観察すると均一に紫色が塗装されているわけではなく、ところどころ赤色が浮き出て斑があり且つ白色に変色している部分があると気がついた。これまでの学びから、色の斑は赤と青の混色である紫色の特徴で、白色の変色は紫外線による劣化ではないかと推測した。1971年に東京文化財研究所の江本義理氏が成巽閣の壁色の分析調査を行っており、蛍光X線分析と蛍光X線回折で剥離部分を非破壊分析した結果、紫色は朱（辰砂・硫化水銀）とウルトラマリンブルーを混ぜて作り出していると分かった。加えて、朱とウルトラマリンブルーの配合比は55：45で朱の方が多めであるという。

以上の朱の配合率が高いという分析調査の結果から、書見の間の紫色を目視した際に赤色が強く見える部分があるのだと理解した。しかし、分析調査後に書見の間に紫壁と対比しながら作成した色見本壁の朱とウルトラマリンブルーの配合比によると、朱とウルトラマリンブルーは2:1となり、分析結果の値と一致しないということに留意しなければならない。この結果の差は、分析試料が少なく不適當であったために生じた可能性があるという江本氏は述べている。また、経年変化による変色を対策するための促進検査では、紫色は黒ずんだのちに白っぽく変化している。これは、朱（辰砂・硫化水銀）が445℃まで過熱すると六方晶系から同形異晶の黒いメタ辰砂に変わるという性質が、紫外線などの光によって引き起こされているからだという。



成巽閣 唐破風

以上のように、書見の間の紫壁を観察して気付いたことを後日調べると、その原因が非破壊の科学調査によって解明されていることが分かった。目視観察をして疑問に感じたことをもとに仮説を立て、調査書や書籍で真相を追究する面白さを感じると共に、将来は文化財の調査や修復を行いたいという思いがますます強くなった。今回のゼミ旅行で感じ、学んだことを胸に日々の勉学に邁進していきたい。

参考文献

- ・江本義理 成巽閣の壁色 東京文化財研究所 1972 年
- ・成巽閣ホームページ <http://www.seisonkaku.com/index.html> (最終閲覧日 2023 年 10 月 21 日)
- ・鶴田榮一 顔料の歴史 2002 年 https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikizai1937/75/4/75_189/_pdf/-char/ja (最終閲覧日 2023 年 10 月 21 日)
- ・石川県ホームページ 2012 年 <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kenzoubutu/8.html#seison> (最終閲覧日 2023 年 10 月 21 日)

ゼミ旅行で分かったこと：南陸斗

金沢城や成巽閣、金沢職人大学校など多くの施設や文化に触れることができたがその中でも金箔に焦点を当ててまとめる。

はじめに、金沢で生産販売されている金箔は「縁付金箔」と「断切金箔」の二種類がある。縁付とは約 40 年以上前から行われている伝統ある製法で、雁皮紙を藁灰汁や柿渋などでつけ込んだ紙を用いて金箔を打ち伸ばし、竹製の道具を用い一枚一枚裁断したものである。断切とは近代的な製法でグラシン紙によって金箔を打ち伸ばし紙と金箔が交互に重なった状態で一気に正方形に裁断する製法である。それらの方法で打ち伸ばされた金は約 1 万分の 1 ミリメートルにまで薄くなり、建築や彫刻、美術、工芸、宗教具、日常品と多岐にわたって活用されている素材である。

現在日本で生産される金箔のほとんどが金沢で作られている。そのため、金沢を歩いていると金箔が使われてユニークなものが目に入る。金箔がふんだんに使われたソフトクリームや金箔の新しい魅力発信プロジェクトとして金沢市公共シェアサイクル「まちなり」に金箔を貼った特別車など金箔をはじめとする金箔の振興を図るために多くの工夫がされていると分かった。そのほかにも 2020 年に日本の木造建造物を受け継ぐための伝統技術の一つとして、ユネスコ無形文化遺産に登録されたが、伝統技術を持つ職人の数は減少し、高齢化も進むことで伝統職人技の後継者育成が強く求められる中で、金沢市が縁付金箔製造の後継者育

成プログラムを事業として立ち上げた。このように、無形文化遺産に登録され、伝統的な技術として認知されている一方で、技術の伝承が難しくなっているという現状を知ることができた。

金箔の色についても多くの種類があり、色の違いによって性質や金箔の作りやすさにも影響が出ることが分かった。通常、金箔は銀や銅を添加した合金でできているが、合金にする理由は、適度な硬さと変形抵抗を与えるためや、色調を変化させることができるためである。これには純金では打ち伸ばしにくいことや金の純度が高いと赤みを帯びた黄金色になり、銀の量が多いと赤みは消失する。一方で銅を添加すると赤みを帯びるなどの特性があることである理由がある。

縁付金箔の製造工程は大きく「澄」、「箔」、「紙仕込み」の三つに分けられる。澄工程は、澄屋と呼ばれる職人が担当し、箔工程は、箔屋又は箔打師と呼ばれる職人が行う。紙仕込みは、それぞれの工程で用いる紙を購入し、澄屋、箔屋が行う。このように金箔の制作すべてを 1 人の職人が行うわけではなく分業でそれぞれの工程の職人がいることが分かった。

金箔製造の工程の多さやその一つ一つの技術の高さはもちろん、金箔があらゆる場面で利用されていることを知ることができた。これまで学んできた、文化財をどのように後世に残し、保存活用していくかという問題ではなく技術をどのように伝承するかという違った角度の問題点を学ぶことができた。

参考文献

- ・金箔金箔伝統技術保存会 公式サイト <https://en-tsukeygoldleaf.jp/> 閲覧日 2023/10/26
- ・金沢市立安江工芸館 <https://www.kanazawa-museum.jp/kinpaku/index.html> 閲覧日 2023/10/26
- ・金箔技術振興研究所 NewsLetter vol. 23 令和 5 年 3 月 31 日発行 閲覧日 2023/10/26



金沢市公共シェアサイクル「まちなり」

～成巽閣と名古屋城本丸御殿を比較して～

： 簀中 美月

ゼミ旅行で成巽閣を見学し、以前訪れたことのある名古屋城本丸御殿と比較をしてどのような共通点、相違点があるかを調べた。まず、それぞれの御殿の概要を述べる。

成巽閣は江戸時代末期、文久3年(1853)に前田家13代齊泰が母堂にあたる12代奥方眞龍院(鷹司隆子)のために建造した奥方御殿である。成巽閣は大名正室御殿としては、国内に唯一現存する建造物となっている。眞龍院(鷹司隆子)の生家、鷹司家の御殿が辰巳殿と呼ばれていたことがあり、それ以外にも辰巳の言葉に縁が深く、金沢城より巽の方角にあることから巽御殿と名付けられ、明治7年(1874)に齊泰は成巽閣という名に改めた。次に、名古屋城本丸御殿は慶長20年(1615)に徳川家康の命によって建てられた。御殿の内部は障壁画や飾金具で豪華絢爛に飾られ、当時の先端技術を用いた近世城郭御殿の最高傑作と讃えられたが、昭和20年(1945)の空襲により焼失した。その後、復元工事開始し現在の姿に至る。

2つの御殿を比較するにあたり、まず注目する点は用途と造りだ。成巽閣は13代齊泰が12代奥方の隠居所として建てたものであり、名古屋城本丸御殿は尾張藩初代藩主である徳川義直の住まいだったが、名古屋城に宿泊する将軍の専用御殿として改築された建物となり、尾張藩主の住居かつ藩の政庁である。両方の御殿の造りは、江戸時代初期に完成したといわれる武家風書院造という建築様式を取り入れている。成巽閣は武家風書院造だけではなく、数奇屋風書院造も取り入れていることから名古屋城本丸御殿と雰囲気は異なっている。奥方の隠居所という目的があるため数奇屋風書院造を採用しており、武家の正殿のような堅い雰囲気ではない。

名古屋城本丸御殿は将軍の御成御殿であるため、部屋の間には極彩色の欄間彫刻がはめ込まれ、天井、飾金具、障壁画など細部に至るまで意匠を凝らしている。一方、成巽閣は日本の伝統的なものだけではなく、当時西洋から輸入されていたギヤマンや高価な顔料を使用した。成巽閣2階の群青の間と書見の間は、鮮やかな色彩の壁や天井が特徴的である。天井は折上天井とし、素材の杉柾を目違いに貼り、蛇腹及び目地には西洋から輸入したウルトラマリンブルーを使用した一風変わった意匠となっており、群青の間の壁には朱を用いた鮮やかな部屋となっている。

名古屋城本丸御殿は江戸時代初期、成巽閣は江戸時代末期に建てられたものであり、成巽閣のように西洋から輸入したものを使用することは江戸時代初期にはできなかったことである。日本の伝統だけを重視す

るのではなく、西洋から輸入したギヤマンや顔料を用いたことから、当時最先端の建物だったといえる。

参考文献

- ・成巽閣パンフレット
- ・名古屋城パンフレット
- ・成巽閣 <http://www.seisonkaku.com>
- ・名古屋城公式ウェブサイト

<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/>



成巽閣入口

金沢における金箔技術：吉田将司

加賀藩の祖前田利家が七尾で金箔を、金沢で銀箔を打つように命じていることから、金沢での箔打ちは16世紀末までには始まっていたことが確認できる。しかし、江戸時代になると幕府が箔座を設置し、諸藩の金銀箔の製造及び販売を禁止したため、18世紀末以降は一度途絶えてしまった。

19世紀に入り、火事で焼けた金沢城の再建にあたって藩が京都から職人を呼んで金箔を打たせたことがきっかけとなり、金沢の職人達は箔打ちの技術を獲得した。御用箔を打ちながらも、金沢の職人達は自由に金銀箔を製造し販売する権利を求めて運動を起こし、幕末には販売権及び製造権を獲得する。

明治以降は産業として発展し、幕府の金座・銀座の廃止に伴って後退した江戸の箔打ちに代わって生産量が増加、大正には電動箔打機の開発もあり、大戦の影響を受けたドイツ箔の穴を埋めるように生産も輸出も伸ばしていった。

伝統技術を用いて製造された金箔は「縁付金箔」と呼ばれ、京都では戦後に途絶えてしまったために現在では金沢が唯一伝承している。2014年にはその製造法を国の選定保存技術に指定され、さらに2020年には「伝統建築工匠の技」の一つとしてユネスコの無形文化遺産に登録された。

まず純金に少量の銀と銅を融解し、板状の金合金を作る。この時の金・銀・銅の比率によって色味が決まる。これを機械で複数回ローラーにかけ、帯状の金合金(厚さ約1/50 mm)を作り、約6 cm角に裁断する。次にこれをハトロン紙に1枚ずつ挟み、200枚を1束にして革に包む。これを機械で打ち伸ばし約12 cm角、18 cm角に打ち伸ばした後に一度裁断し、次は澄打紙に挟んで800枚を1束として革に包み、これもまた機械で打ち伸ばしていく。約20 cm角に打ち伸ばすと、艶消しに仕上げるために1枚ずつハトロン紙に移し替え、機械で軽く叩いてから三つ折りにする。これで「上澄(厚さ約1/1,000 mm)」の完成である。これらの作業を「澄工程」と言い、澄職人が行う。

次に、厚さが不均一な上澄を職人の目利きで大きさを変えながら切り分け、箔打紙の間に挟む。約1800枚を1束にして革に包み、機械で打ち伸ばす。この作業によって熱が生じるため束を小分けにして熱を冷まし、また機械で打ち伸ばす。これを約10 cm角になるまで繰り返す。次に、これを仕上げ打ち用の箔打紙に移し替え、電熱器を用いて箔と箔打紙の湿気を飛ばす。箔の厚さを約1/10,000 mmになるまで機械で打ち伸ばしたら、100枚で1冊の広物帳(三桎紙)へ品質確認をしながら一時保管のために1枚ずつ移し替える。移し終えた金箔を革板の上に移し、竹製の枠で規定サイズに切り揃える。これを箔合紙(三桎紙)と交互に重ね、「縁付金箔」の完成である。これらの作業を「箔工程」と言い、箔職人が行う。

伝統技術を用いた縁付金箔は金箔全体の生産量の20%であり、金沢金箔の主力は生産量の80%を占めている「断切金箔」である。カーボン紙を使うことにより製造工程の省力化を実現し、縁付金箔とは違った輝きを持っている。断切金箔の生産量と縁付金箔の質感を武器に、金箔は金沢の産業を支え、また観光客の注目を集めている。



金箔を用いたプロジェクタースクリーン

IV. 熱海・箱根の文化遺産をめぐる

2023. 9. 11～9. 12

観光地の美術館から学ぶこと

担当教員：神田雅章

美術史ゼミは、例年、ゼミ生の希望するところを行先としている。今年は熱海・箱根方面に決まった。大方、温泉に宿泊することを期待しての選択だったのだろうが、残念ながらゼミの予算はそれほど潤沢ではない。初日は熱海の MOA 美術館と近代建築の起雲閣を訪れ、その後、小田原へと移動して、天守閣を復元した小田原城を見学。2 日目は箱根登山鉄道で野外展示が特色である彫刻の森美術館まで足を延ばし、午後は芦ノ湖畔に向かい復元整備された箱根関所跡と箱根神社宝物館を訪ねるという、1 泊 2 日の行程を組んだ。なるべく皆の意見を取り入れ、多くの場所を見学しようとする、自ずと内容は雑多になる。研修にしては自由度が高いかもしいが、物見遊山のつもりはない。ゼミ生自らプランを立て、見せられるのではなく、見たいものを見ることを重視してのことである。

今回訪れた見学地の中で、美術史ゼミとしてのメインはやはり熱海の MOA 美術館と箱根の彫刻の森美術館だ。熱海と箱根は、首都圏からも訪ねやすい人気の温泉地として知られ、両美術館ともに、それぞれタイプは異なるものの、典型的な観光地型的美術館といえるだろう。多くの団体旅行客を受け入れる美術館は、都市型的美術館とはやや異なる独自のコンセプトを持つところが少なくない。

日本の中規模以上の美術館は、一般的にマスコミなどとタイアップし、多額の費用をかけて内外から作品を集める特別展を中心にまわしている。それぞれの館が持つ本来の特色が見えにくく、常設展の集客力の乏しさがしばしば弱点として指摘される。これは日本特有の現象らしい。観光地の私設美術館にとっては、常設展はとりわけ重要なポイントになるだろう。ルーブル美術館のミロのヴィーナスのように、「ここに行けばあの作品に会える」というものをどれだけ持つことができるかが重要となる。

MOA 美術館の場合、それは尾形光琳の国宝「紅白梅図屏風」であろう。毎年、梅の開花の時期に合わせて展示される。近くの梅林と合わせて咲き誇る梅の花を楽しんでもらう趣向だ。余談ながら入口までの長いエスカレーターと円形ホール（巨大万華鏡）も、美術館とは思えないアトラクションのような演出で、この名物となっている。

彫刻の森美術館ならば、ヘンリームーアの作品群

をあげたい。緑豊かな自然に囲まれた彫刻作品は、青空の下、陽光を浴び、美しい箱根の風景に溶け込んでいる。ここで過ごすひと時は「美術館の風に吹かれて」というテレビ番組のタイトルそのままに、心地よい開放感をもたらしてくれる。美術館に日常を忘れるような癒しを求める人は少なくない。混雑した都会の美術館では味わえない、観光地ならではの魅力が両館にはあり、美術作品の展示と鑑賞の在り方について改めて考えさせられる。

今回はたくさん歩き多くの路線バスを用いた。厳しい暑さの中、このような行程が、16 人という多人数での移動に向いていないことは言うまでもない。たいへん不安だったが、皆でバス停を探したり時刻表を確認したりしながらの移動は、それはそれで楽しいもので、明るいゼミ生の姿に元気をもらった 2 日間だった。これをきっかけに各自が文化遺産を訪ねる旅に出かけるようになることを期待している。

小田原城を訪れて：池田匠弥

まずは、今回訪れた小田原城について述べていこうと思う。

現在我々が見ることのできる天守閣は昭和 35 年(1960)に鉄筋モルタルによって作られ、平成 28 年(2016)にリニューアルを経て現在の姿になっており、いわゆる復興天守と呼ばれる分類になる。

小田原と言えば戦国大名である北条氏の印象が強い。元亀元年(1501)には北条早雲が小田原に入っていたと言われている。

その後、天正 18 年(1590)に豊臣秀吉により開城されるまで北条氏の城であった。



神田ゼミ集合写真

その後も様々な人物が城主を務め、明治3年(1870)に廃城、天守などが解体、売却された。

大正12年(1913)には関東大震災によって石垣や二の丸の櫓が倒壊してしまった。

昭和13年(1938)には小田原城址が国指定史跡に指定され、冒頭の昭和35年(1960)の天守閣復興、現在に至る。

それでは、実際に見学しての感想に入っていこうと思う。

城郭は城郭でも松本城や、彦根城といった現存している天守閣は天守閣の中にほぼ何もなく、なるべく当時の姿を再現しているように思えるが、先述した通り小田原城はコンクリートの復興天守である。館内は城というより、資料を展示してある博物館のような空間が広がっていた。展示内容としては、北条氏関連の展示をはじめ、江戸時代の小田原城、また、近現代の小田原城について甲冑等をはじめ、映像資料も館内にはあった。

映像資料に関しては、豊臣秀吉による小田原攻めについての映像だった。

北条氏としてはそれ以前に永禄4年(1561)に上杉謙信、永禄12年(1569)に武田信玄に攻撃を受けたが、いずれも籠城戦によって退けることができた。しかし、豊臣秀吉の前に北条氏直は敗れ、小田原城開城となる。

映像では、当時の様子が再現され、小田原城の周囲には豊臣軍の軍勢、それも名だたる武将の軍が包囲しており、さらに、石垣山一夜城の存在も北条軍の戦意を喪失させる要因となった。ある日急に城の付近に豊臣軍の城が現れたとなれば、かなりの混乱を招くだろう。私自身、自分がそのような状況下に置かれれば、戦う気が無くなっていくだろう。

実際に天守の再現されたスペースや、展望デッキに出て当時を想像した。やはり周りが敵に囲まれていることもあり、かなり絶望感のある様子だったのだら



小田原城から望む景色

うと当時のことを考えた。

私は今回、小田原城を見学し、復興天守の戦国に関する文化遺産の保存の場、博物館的な活用ができるのではないかと考えた。復興天守は言ってしまえばコンクリートで造られた建築であるため、屋内設備等については現存のものよりも自由が効くのではないかと考える。そのため、城の博物館的な活用と言うのは全国的にも行われているのではないかと思う。これに関しては私の調査不足であるが、今後見学をした際は注意して見学したい。

美術史ゼミの内容でこのような結論になってしまったが、ゼミ旅行の報告としようと思う。

【参考文献】

北条氏五代と小田原城(山口博 吉川弘文館 2018)

彫刻の森美術館を訪れて：稲垣杏奈

彫刻の森美術館は、富士箱根伊豆国立公園に位置する。その自然を生かして、フジサンケイグループにより1969年に開館した美術館である。創設者であり初代館長の鹿内信隆は、「彫刻のための美術館は日本では前例がないため、彫刻の発展に寄与する」ことを目的とした。箱根のこの地は、丘や小川、池があり、両側の山を借景とし、地平線の彼方に海が遠望できる景観を備えている。作品収集は近・現代の彫刻を中心にする一方、主に1970年代以降の絵画も集め、現在の所蔵数は2,000点あまりになっている。作品の多くは、耐久性のある恒久的な種類の彫刻に限定されている。野外彫刻が成立するには、風雪と時の流れに耐え、長く存在することにあるためである(*)。

“彫刻のための美術館”という通り、さまざまな彫刻作品が野外に点在しており、山の心地良い空気を感じながら歩き回り鑑賞することができる。非常に開放感があるとともに、作品を見つけては立ち止まって鑑賞するという時間はとても新鮮なものであった。中でも、入場後トンネルを抜けて、太陽の光とともにすぐに目に入った『人とペガサス』に特に惹かれた。1949年にカール・ミレスによって作られ、ブロンズ製、250×336×140 cmの作品である。ギリシャ神話の英雄ベレロフォンがペガサスに乗って、怪物キマイラの退治に向かう場面である。そそり立つ台座の上で人もペガサスも思いきり体を伸ばし、さらに高く飛翔しようとする(*)。高さのある柱の上に人とペガサスが乗っているような形であるが、絶妙なバランスと緑の山々と青空が広がる背景はより一層躍動感を加えて、実際に飛んでいるかのように感じられる。これこそ、野外展示ならではの魅力である。

四方が山に囲まれている中に位置する美術館として、自然の景色、広さが最大限に活用されている。そ

のような開放感溢れる空間で鑑賞する作品たちには、ロケーションの素晴らしさから新たな価値が加わっているのではないだろうか。今回、ゼミ旅行という機会彫刻の森美術館に訪れたことで、初めて野外展示で作品を鑑賞することができた。仮に、作品が屋内の一角で展示されていたとしたら必ずしも興味を引いたとは言えない。それほど、山と空の景色を背景に持つ展示は魅力的であった。私は、展示方法が作品の見え方や価値に大きく影響し、そのために作品に合った展示方法を熟考する必要があるということ学んだ。また、敷地内は広大で見たい作品や展示室、スポットを限定して鑑賞することも可能であったり、子どもたちが自然に囲まれながら活動することができ、その中で彫刻にも出会う機会となれたり、人を選ばないかつさまざまな楽しみ方ができる場所だと感じた。ここにおいて、「彫刻の発展に寄与する」という目的が果たせていると考える。

(*) 箱根 彫刻の森美術館 THE HAKONE OPEN-AIR MUSEUM (hakone-oam.or.jp)

moa 美術館を訪れて：浦天音

moa 美術館とは、東洋美術の絵画・書跡・工芸を中心に国宝3点、重要文化財67点、重要美術品46点を含む約3500点の収蔵品を誇る熱海を代表する美術館である。美術館は7万坪にも及ぶ熱海の高台に建てられていて、館内にある全面ガラス張りのロビーや、広



彫刻の森美術館『人とペガサス』

場、併設されているカフェからは曇り空ではあったものの、美しい相模灘と山の下に見える街並みを同時に味わうことができた。

この美術館を訪れる際、事前調査から館内の構造について特に目を引いたものは入り口にある約25m～35mのエスカレーターと直径約20m、高さ約10mの円型ホール、黄金の茶室であった。入口すぐのエスカレーターはこのままどこまでも続いているのではないかと思うほど長く、その途中にある円型ホールは世界6か国から集めた大理石が床に敷かれており、それまでとはまた違った空間となっていた。この円型ホールは普段は日本を代表する万華鏡作家の依田満・百合子夫妻による世界最大級の万華鏡が投影されているのだが、私たちが訪れた際はちょうど改装中であったため、ホームページなどに掲載されているようなきれいな映像は見ることができず、残念であった。黄金の茶室は天正14年正月豊臣秀吉が正親町天皇に茶を献じるために、京都御所内の小御所に組立式の黄金の茶室を運びこみ、黄金の道具を用いて茶会を行ったという史実に基づいて復元制作したもので、公家、武将、茶人、外国の宣教師などが記した文献史料に基づき、数奇屋建築の泰斗堀口捨己博士の監修のもと復元された。茶室らしく、豪華な造りではなく、閑寂な茶室という造りではあったが、部屋の内部はほぼすべて金色で、茶器や壁、天井のすべてが想像していた以上にぎらぎらとしていた。この茶室だとよく使われる通常の畳の色であると畳が浮いてしまいそうだが、畳の色を深い赤色にすることで、壁の金色とうまく調和していた。閑寂な造りの茶室と豪華な雰囲気がある金箔という対照的な2つを組み合わせることですっきりとしてはいるが豪華絢爛な茶室という桃山時代ならではの建築だと感じた。

また、この美術館では特別展として「7人の人間国宝展」というものを行っていた。普段私はこのような題材の展覧会に行くことがないので、事前調査の段階



MOA 美術館

moa 美術館を通して、普段は興味がなく見ることが
なかった新しいジャンルの作品と出会うきっかけを得
ることができた。今回に限らず、人間国宝の作品もま
た見ていきたいと思う。

– 32 –

なってからである。1999年の廃業まで熱海を代表する宿として数多くの宿泊客を迎え、現在は熱海市指定有形文化財となっている。

私が起雲閣を訪れるにあたって最も楽しみにしていた部屋は「麒麟・大鳳」と呼ばれる和館である。起雲閣の最初の持ち主であった内田信也が実母の静養の場所として建てた別荘の座敷であり、構造自体は豪華な装飾や際立った特徴はない、非常に簡素な部屋である。だが部屋の壁は全て群青色の漆喰であり、鮮やかな青色が非常に印象的であった。この壁は「加賀の青漆喰」と呼ばれる石川県加賀地方の伝統的な手法であり、のちに起雲閣を旅館として開業した桜井兵五郎が石川県出身であったため取り入れたとのことだった。縁側のガラスも大正時代に職人が手作りのものであり、ガラス窓と群青色の壁の組み合わせは簡素でありながら近代的で洒落た座敷を生み出しており非常に見応えがあった。

二階座敷の大鳳には太宰治が愛人の山崎富栄と宿泊したとされる。大鳳での宿泊は1日だけだが起雲閣別館には一ヶ月滞在しており、『人間失格』を執筆していたといわれている。別館についてはすでに取り壊されており写真資料のみの展示であったが、外観からも重厚感ある豪華な建物であったことが伝わり、実物を見ることができないのが惜しいと感じた。

次に印象的だった建物は「玉溪」と呼ばれる洋館だ。「玉溪」はイギリス発祥のチューダー様式に日本の建築技術を取り入れた、ヨーロッパの山荘風の洋館である。和洋折衷の建築物は全国に数多くあるが、「玉溪」はその中でも独自性が高いように思われた。「玉溪」の柱は「名栗仕上げ」と呼ばれる日本の木材加工技術を取り入れており、細部まで趣向が凝らされていることが見て取れた。ただし暖炉脇の柱だけは太い丸太であり、材質も異なっていた。この柱は古い寺か神社の柱とも、江戸時代の帆船の帆柱ともいわれており、柱と暖炉で日本建築の「床の間」と「床柱」に



起雲閣「玉溪」

も見立てられるとのことであった。天井付近に仕切りのような壁を少し設け、談話する場所との区切りを作っているところからもその意図は感じられた。暖炉にはサンスクリット語の飾りなど、仏教的な装飾が設けられていた。洋館と仏教美術の組み合わせは個人的には珍しく、このような点からも起雲閣の独自性が感じられた。

独自性の強い和洋折衷の内装や旅館業時代の著名人のエピソードなど、起雲閣は非常に高い文化的価値をもつ建物であることを今回の見学で知ることができた。

小田原城見学を経て：金井アイシャ

神奈川県小田原市に位置する小田原城は、鎌倉時代の初めに土肥氏によって築城された。戦国時代に北条早雲が入城した後は北条氏の本城として関東統治の中心となったが、天正18年（1590）に豊臣秀吉の小田原攻めで落城する。江戸時代には幕府の重要拠点として譜代大名が配された。そのまま幕末まで重要な役割を担っていたが、明治3年に廃城となり、天守閣をはじめ建築物はことごとく取り壊しになってしまう。残っていた石垣も大正12年の関東大震災によりことごとく崩れ落ちてしまった。現在の小田原城跡は、本丸・二の丸の大部分と総構の一部が、国の史跡に指定されている。

その為現在の小田原城天守閣は、昭和35年（1960）に市制20周年記念事業として復興されたものである。戦後間もない昭和25年（1950）、長期に渡り崩壊したままとなっていた天守閣の復興に向け、市内の町内会で「天守閣石一積運動」が始まったのだ。この募金活動と、後に小田原商工会議所によって設立された「小田原城天守閣復興促進会」の積極的な訴えにより復興活動は県をも動かす大規模なものとなった。こうして結果的に集まった募金額は2000万円を上回る結果となる。そして、これと並行して進められた復興運動が「天守閣復興瓦一枚運動」である。昭和34年（1959）から受付が開始され、最終的には金額にしておよそ240万円分の瓦、計2万1366枚が寄せられたという。現在の天守閣に葺かれた瓦の約三分の一には、この運動に参加した人々の名前が記されている。この天守閣復興の経緯を知り、ほぼ全壊となっていたこの城がいかに小田原市民に愛され、シンボルとして讃えられて現在の姿に至ったかを再確認した。

また、この工事では展示室も大幅にリニューアルされている。1階には江戸時代の小田原城、2階では小田原北条氏の歴史や戦国時代の小田原城の様子を紹介されており、小田原城を中心に小田原の歴史的魅力を伝えるストーリー性のある展示が見られた。私は展

示室の中でも、特に上下に画面で展開される小田原攻めの再現映像が印象に残っている。なぜ難攻不落と謳われた小田原城が豊臣秀吉の手にかかり、落城するに至ったのか。大河ドラマを見ているかのような緊迫感に暫く見入ってしまった。こういった映像展示は軽い解説にとどまる程度だ、という印象を持つことが多い為、この映像の品質の高さに驚いた。

最上階である5階には、かつての小田原藩有林を中心とした小田原の木を使用し、江戸時代の天守最上階の一部が再現されていた。また、この空間には摩利支天像が安置されており、猪の背に直立した様相の本像は、武士の守護神として古くより信仰されてきたという。空間の構成上、近くで観察することは叶わなかったことが悔やまれる。

また、外周に広がる展望デッキからは相模湾が一望できた。ビルが眼下に立ち並んだ現代の街並みでありながらも、江戸時代とほぼ変わらないであろう山々や海を目におさめられたのは貴重な経験であった。

【参考文献】

小田原市 小田原デジタルアーカイブ 天守閣復興瓦一枚活動 <https://www.city.odawara.kanagawa.jp/darc/item/113/>



小田原城展望テラス入り口

MOA 美術館の見学を経て：北澤蒼梧

MOA 美術館は静岡県熱海市にある私立博物館。昭和57年に開館し、平成28年から平成29年にかけ、展示空間の刷新と設備の更新を目的として改修工事が実施された。MOA 美術館では日本美術を中心とした展覧会と共に伝統工芸や芸能に取り組んでおり、日本文化の継承と発展に努めている。美術館の名前である MOA は創立者の岡田茂吉の Mokichi Okada Association の頭文字から付けられた。

MOA 美術館のコレクションは岡田茂吉によって第二次世界大戦後から本格的に蒐集され、現在では国宝3点、重要文化財67点、重要美術品46点を含む約3500点を所蔵し、それは絵画、彫刻、陶磁器、漆工芸等多様な分野にわたる。

国宝は『紅白梅図屏風』尾形光琳、『色絵藤花文茶壺』野々村仁清、手鑑『翰墨城』の3点である。

中でも目を引かれた作品は『色絵藤花文茶壺』だ。サイズは一口 高28.8cm、口径10.1cm、胴径27.3cm、底径10.5cm。作者である野々村仁清の作品は、巧みな轆轤の技術と華麗な上絵付けに支えられた茶壺、水指、香炉、香合などの茶道具で占められているが、その代表作といわれるものが色絵の茶壺である。この色絵藤花文茶壺は仁清の茶壺の中でも最高の傑作としても名高く、京風文化の象徴的作品とも言えるだろう。温かみのある白釉地の上に藤花が巧みな構図で描かれており、花穂と蔓は赤や紫、金、銀などで彩られ、緑の葉には1枚1枚葉脈を施している。総体が均等に薄く挽き上げられた端正な姿は色絵の文様と程よく調和しており、下部の土見も壺全体のバランスをよく保っている。私自身、国宝の壺を見たのは記憶の中では初めてだった為、長時間見入ってしまった。暗い空間の真ん中に壺があり、光っているかのように展示されており、どの角度から見ても綺麗に見えるように展示が工夫されていると感じた。

MOA 美術館の楽しみ方は美術館の展示品を見てまわ



MOA 美術館『色絵藤花文茶壺』

るだけではなく、ショップで伝統工芸作家による工芸品が購入できたり、舞台上で伝統芸能の紹介や、クラシックコンサートが楽しめたり、レストランでは伝統的な食器でランチやお茶を楽しんだり、様々な楽しみ方ができる美術館である。また、屋外では茶の庭と言われる日本庭園と様々な建築が広がっており、初夏の庭は新緑で覆われ、季節の草花が彩る。秋には150本以上あるモミジが紅葉し、熱海市の紅葉狩りスポットとしても人気である。ここでは尾形光琳が国宝「紅白梅図屏風」を描いたとされる屋敷を復元した光琳屋敷という建物が建っており、2階に絵所が設けられている。このようにただ作品を見て廻る美術館でなく、日本文化や伝統工芸品、伝統芸能にしっかりと触れることができるということがMOA美術館の良い所であると感じた。

《参考》

MOA 美術館ホームページ <https://www.moaart.or.jp/>

起雲閣の和洋：立花一佳

1919年に日本の実業家である内田信也により別荘として築かれた。1947年に旅館として生まれ変わった。2,000年に熱海市の所有となり、今日では文化と観光の場として扱われるが、実際に足を運んだことで、旅館として泊まってみたいという願望が生まれた。

和館の麒麟、大鳳の畳廊下の窓ガラスは、一枚一枚職人が作ったもので、微妙な歪みがあり、いい雰囲気を出しているようだ。さらに、この歪みによって部屋に入る日光が均等になり部屋からの景色だけでなく、部屋自体も美しくしているのではないかと感じた。起雲閣の建物は、和風の空間だけでなく、洋館もある。玉姫・玉溪・金剛などの部屋がある。どの部屋も椅子・机の配置からして対談しやすい構造になっている。さらに、ローマ風浴室までも向かい合える構造となっている。起雲閣は山本有三・志賀直哉・谷崎潤一郎・太宰治などの文豪を客人として迎え入れていた。それぞれの部屋をまわると、文豪たちが関係者たちと様々な議論を交わして作品を世に出していたのだと想像ができる。そして、窓から見える庭園はどの部屋からも美しく見え、文章から一旦離れて休憩するのに最適な場所だったのではないかと感じた。この庭園は、散策も楽しむことができる池泉回遊式庭園であり、四季を感じられる。

玉姫は豪華なシャンデリアと日本の神社仏閣に見られる折上格天井が用いられ、和洋折衷のバランスが取れている。様式が異なるものが一つの空間に存在するものの、空間それ自体は和の主張も洋の主張もどちらかが弱すぎたり強すぎたりすることなく、それぞれで

いい雰囲気を作り上げている。玉溪の部屋は中世英国のチューダー様式に名栗仕上げを取り入れた山荘風の作りとなっているようだ。暖炉が特徴的である。暖炉周辺のレンガ・椅子は青色で、レンガの青色は濃淡が異なり、濃い青色のレンガが散りばめられている。玉溪の椅子は玉姫の椅子とは異なりソファに近い構造である。椅子は机を挟んで暖炉の向かい側、暖炉の左右に配置されている。暖炉を正面とする側の椅子に座ると、暖炉の上の仏の彫刻・暖炉の中の細かい装飾が楽しめる。

暖炉側からみて右側の椅子に座れば窓からの庭の景色を、左側の椅子に座れば隣の玉姫の空間が目に映る。それぞれの配置に起雲閣を楽しむことができる良さがある。

サンルームは名の通り日光が差し込むように作られ、天井・屋根共にガラスを用いている。この天井の装飾は唐草模様が特徴的である。また、サンルームには左右対称のデザインを施したドレッサーが配置されており、庭園の景色を邪魔しないよう壁側に位置するが、このドレッサーがあることで唐草模様と洋風のバランスが取れている。

起雲閣全体を通して感じたのは、和洋折衷の視覚的美しさや、旅館として訪れた快適さが想像できるということだ。今回のゼミ旅行で起雲閣にたくさんの客人が足を運んだ理由がわかった。

小田原城を訪れて：西本将太郎

初めに小田原城の歴史について軽く紹介しておく。小田原城は室町時代の城郭を前身とする城で、1500年頃の北条早雲の関東進出以降、北条氏5代約100年の関東支配の中心拠点として整備拡張された。豊臣秀吉の侵攻に備え、城と城下町を総延長9kmに及ぶ総構を建築し、その規模は最大となった。しかし、天正18年(1590)の秀吉の小田原攻めにより開城、北条氏は滅亡した。その後、大久保氏や稲葉氏が城主と



起雲閣 サンルームの天井

なり、城郭の姿が一新された。そして、明治3年（1870）に廃城となり、以降明治5年（1872）までに城内の多くの建物が解体され、後に県庁や県支庁・御用邸などが建てられたが、大正12年（1923）の関東大震災の際にこれらの建物の他、石垣もほぼ全壊した。その後、昭和9年（1934）に隅櫓、昭和35年（1960）に天守閣、昭和46年（1971）常磐木門、平成9年（1997）に銅門、平成21年（2009）に馬出門が再建された。また、昭和13年（1938）に二の丸・三の丸の一部、昭和34年（1959）に本丸と二の丸の残り全部が国の史跡に登録されている。

次に実際に小田原城を訪れて思ったことについて述べていこうと思う。天守閣は江戸時代の模型や設計図を基に外観復元された3重4階の付櫓・渡櫓を付した複合天守閣で、内部は資料展示室になっている。展示では、北条氏の歴史やそれに関わる資料、明治以降の小田原城を写真で知るなど、とても充実した内容だった。その中でいくつか印象に残ったものがある。一つ目は、戦国時代の小田原城についての展示の中にあった、秀吉による小田原征伐に関する展示である。このとき秀吉は小田原城を包囲していくが、名だたる武将を陸上だけでなく海上にも配置しており、その布陣図をみるだけでも成す術もないことが伝わってきた。だが、それを実際に最上階の展望台から見るとさらに強くそれを感じた。そこに自分たちの城よりも高い位置に一夜城で有名な石垣山城が現れたとなれば北条側がさらに大きな絶望感につつまれたことは想像にかたくない。次に、明治以降の小田原城についての展示である。ここには関東大震災で崩れてしまった石垣と建物の姿やそこから復興するまでの写真などが展示されていたのだが、その中に、天守閣跡に観覧車が設置されている写真があり、過去に城跡に遊園地があったということが分かるととても面白い資料だと思った。また、本丸にサルがおり、訪れた時には何故いるのだろうと思ったのだが、後で調べてみると令和5年（202

3）の12月に引っ越すことになっている小田原城動物園の最後の動物であった。他にも天守閣や門の再建には市民の寄付が寄せられたり最上階の摩利支天安置場所の再現に地元の人達が関わっていたりなど、小田原城は地元の人たちに昔から愛されていることがよくわかる良い場所だと思った。

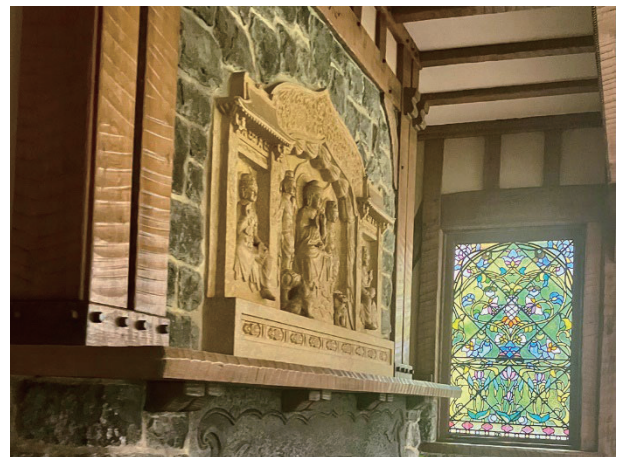
起雲閣について：堀川楓華

起雲閣は、熱海市指定有形文化財に登録されている1918年に内田信也によって建設された建物である。1925年には根津嘉一郎が別邸として土地を取得し、その後1947年に桜井兵五郎が起雲閣を旅館として開業した。2000年には熱海市が取得し一般公開される現在の形へと移る。和と洋が混在している点が特徴的な建物である。

特に玉渓は中世英国のチューダー様式に名栗仕上げを取り入れたヨーロッパの山荘風の造りになっている。チューダー様式とは、15世紀末から約1世紀続いたイギリスの建築様式で、1485～1603年まで続いたチューダー朝に由来する。イギリス・ゴシック建築の後期の様式で垂直式とも呼ばれるパーペンディキュラーに、イタリアやフランスのルネサンス建築の要素が加わった過渡的様式で、次のエリザベス様式に続くものだ。中世的な技法とイタリアルネサンス様式との混合が特色で、教会建築の代表的作品としてはウィンザー宮のセント・ジョージ礼拝堂やウェストミンスター寺院のヘンリー7世礼拝堂、その他、ハンプトン・コート宮の大ホール、ケンブリッジのクイーンズ・カレッジなどが挙げられる。木の骨組をれんがや漆食で埋めたハーフ・ティンバー式木造住宅もチューダー式とよばれている。しかしこの玉渓は、すべてがチューダー様式ではなく、暖炉の覆いにはサンスクリット語の飾り、入口の天井には茶室のように竹が用いられるなど、国際色豊かな独特の空間となっている。暖炉脇の太い円柱は、古い寺か神社の柱か江戸時代の帆船の



小田原城



起雲閣 名栗仕上げと仏

帆柱を転用しているといわれており、この柱と暖炉は、日本建築の床の間と床柱にも見立てることができると考えられている。廊下を含めた各部屋の窓のうちで上下に開閉する窓の両側の柱は内部が空洞になっており、内部にワイヤーで窓に繋がれた鉛の錘が吊り下げられているため、滑車によって上下に開閉する窓の動きをスムーズになっている。柱には独特の削り跡が残されており、これを名栗仕上げという。この加工方法は、古くから門扉や濡れ縁、腰板など日本建築の様々な場所で使用されてきた。一般的な平たい仕上げとは異なり、全体的に躍動感のある雰囲気を出している。

玉溪は1932（昭和7）年 玉姫の棟と共に、明治から昭和期にかけて活躍した政治家で実業家の根津嘉一郎によって竣工された建物だ。東武鉄道社長を務め、鉄道王として名をはせた根津嘉一郎が、ここでどれだけの日々を過ごしたかは図りかねるが、和洋折衷の建築からは西洋への憧れと日本文化の尊重が感じ取れる。起雲閣見学を通して、西洋から流入してきた建築様式を当時の建築家がどのように取り入れていったのか興味深いと感じた。これから様々な近代建築を訪れてみようと思う。

箱根神社欄間彫刻について：政川綾音

箱根神社は神奈川県足柄下郡箱根町にある山岳信仰が基となる神社で、鎌倉時代に源頼朝が箱根神社と伊豆走湯権現の二箇所にて詣でる二所詣を創始して以来関東地方の武将たちに深く信仰されてきた。境内には芦ノ湖の守護神とされる九頭龍大神を祀る九頭龍神社の新宮や父親の仇討を成し遂げた曾我兄弟を祀る曾我神社など末社も数多く在る。また、駒ヶ岳山頂には山岳信仰の拠点となる箱根神社元宮があり箱根神社・九頭龍神社・元宮の三社を回る三社参りも盛んである。さらに芦ノ湖中に建てられている平和の鳥居は写真スポットとしても人気であり老若男女問わず訪れる場所と



箱根神社の欄間彫刻 獅子

なっている。

箱根神社本殿には荒れる波と龍の彫刻が施されており、なかなかの存在感を放っていた。この彫刻は九頭龍神社の由緒である芦ノ湖の龍の伝説を模したものではないかと考える。また、木鼻にも獅子の彫刻が施されており口の形も阿吽で作り分けられている。さらに、木鼻に近い雲肘木にも花の彫刻があしらわれている。しかし、私が注目したのは彫刻のモチーフではなく彩色である。箱根神社の建物自体は綺麗に塗り直されているが、上記の彫刻は塗装が所々剥げておりお世辞にも綺麗とは言い難いものとなっている。これらの彫刻を見て私は何故彫刻も塗り直さないのだろうかという疑問に思い、その理由をいくつかの仮説を立てて考えてみた。まず金銭的な理由で塗り直さないという説を考えてみたが、本殿の横にある九頭龍神社の新宮は最近建てられたものであったので金銭的には余裕があるとみなし没案とした。次に現在の彫刻の色彩が建物の色彩と合っているから塗り直さないという説を考えてみたが、現地で観察しても撮影した画像を後から見返してみても建物と彫刻が調和しているとは思えずらくこの案も没となった。けれどもその中で一つ現実味のある仮説を思いついた。それは敢えて彫刻を元の彩色に塗り直さずそのまま保存しているというものである。以前他の講義の一環で永観堂へ見学に行った際に、阿弥陀堂の内部に敢えて彩色を復元せずにそのまま残してある部分が紹介されていた。この彫刻もその事例と同じではないかと推測し箱根神社について調べてみたところ、箱根神社の社殿は1930年に倒壊していたことが分かった。そこで、建物は新しく建て直したものであるため塗り直したが彫刻は倒壊前のものであるためそのまま保存しているという仮説を新たに立て修理事業に関する事柄を調べることにした。しかし、箱根神社の修理報告書は公開されておらず仮説を実証するには至らなかった。けれど、これからさらに神社の彫刻を研究していけばいつか分かる日が来るのではないと思う。今回の調査は彫刻への興味をより深める良い体験となった。

1 花の種類までは特定することはできなかった。

2 箱根神社宝物殿一階に展示されていた年表に記載されていた。

参考文献

箱根神社公式HP <https://hakonejinja.or.jp/> 最終閲覧日 2023 年 10 月 28 日

ゼミ旅行レポート：増田寛之

私はゼミ旅行で1番印象に残った箱根神社について報告します。

まず初めに箱根神社がどのような場所であり、ま

た歴史についてです。

箱根神社は、古来、関東総鎮守箱根大権現と尊崇されてきた名社で、開運厄除・心願成就・交通安全・縁結びに御神徳の高い、運開きの神様として信仰されています。箱根神社の創祀は、当社の縁起『筥根山縁起并序』（1191年成立）によると、第5代孝昭天皇の御代、聖古仙人が箱根山の駒ヶ岳に神仙宮を開き、同主峰の神山を神体山としてお祀りされて以来、関東における山岳信仰の一大霊場となりました。奈良時代の天平宝字元年（757）、箱根山に入峰した万巻上人が、箱根大神の御神託を授かり勅願をもって現在の地に社殿を建立しました。この箱根大神を奉斎する社は「箱根三所権現（箱根権現）」と号し、仏教とりわけ修験道と習合し朝野の信仰をあつめました。平安時代初頭、東海道の官道として箱根路が開通すると、当社は道中安全を祈る往来の人々によって遍く知られ、武家の興隆とともに名だたる武将が篤い崇敬を寄せました。平安時代の延暦20年（801）、征夷大將軍の坂上田村麻呂は蝦夷征討の際に参詣して表矢を奉獻。この嘉例に倣い源頼義もまた天喜年間に参詣し表矢を献じました。

私が実際に行って感じたことは他の神社ではあまり見られない特徴的な神社であるという点です。一つ目は鳥居が六つありそのうち一つは芦ノ湖の中にあること、二つ目は湖の中にある鳥居の額が陸からでは見えず湖側にあること、三つ目は湖と山に深い関わりがあることです。一つ目と二つ目に関しては、訪れた際1番大きくインパクトのあるものであり、額の文字が見えなかったためスワンボートで湖側から確認したほどです。これは上皇陛下の立太子礼と日本の独立した際、講和条約締結を記念して1952年（昭和27年）今から67年前に建てられました。額には何と書かれているか分からず調べると、1964年箱根大神御鎮座1200年と東京オリンピック開催を奉祝記念し、「平和」の扁額が掲げられ、筆で書かれた講和条約の全権特命大使として調印した吉田茂元首相の真筆になるものようです。ただ非常に読みにくいため知らない人は半数は読めない、見えないのではないかと感じました。三つ目に関しては元々箱根神社は山岳信仰の一大霊場であったが時代が進み急に湖に鳥居が出現しあたかも湖と深い関係があるかのように錯覚していたのではないかと考えました。

これらのことから私は箱根神社は古くから歴史があるだけでなく現代に至ってもしっかりと新たな役割を持つ神社は少ないのではないかと感じ、それにより多くの観光客が訪れて一大観光地としての役割も果たし、SNSにも投稿されるなど時代に応じ役割が増えていく特異な存在である神社ではないかと考えました。

箱根神社：森えりか

・概要

箱根神社は、古来、関東総鎮守箱根大権現と尊崇されてきた名社で、開運厄除・心願成就・交通安全・縁結びに御神徳の高い、運開きの神様として信仰されています。

箱根神社の創祀は、当社の縁起『筥根山縁起并序』（1191年成立）によると、第5代孝昭天皇の御代、聖古仙人が箱根山の駒ヶ岳に神仙宮を開き、同主峰の神山を神体山としてお祀りされて以来、関東における山岳信仰の一大霊場となりました。奈良時代の天平宝字元年（757）、箱根山に入峰した万巻上人が、箱根大神の御神託を授かり勅願をもって現在の地に社殿を建立しました。この箱根大神を奉斎する社は「箱根三所権現（箱根権現）」と号し、仏教とりわけ修験道と習合し朝野の信仰をあつめました。

・文化財

男神座像 〈重要文化財〉

本像は「箱根神社神像群」と称する平安から鎌倉時代の8軀の神像のうちの1軀で、平安時代（11世紀前半）の制作とみられる男神坐像。檜ひのきの良材を用いた一木造りで像高は67.5cm。頭部に幅広の巾子太笄を有する冠を戴き、冠に付く纓は二条の燕尾で両肩に懸り、袍・袴を着して坐し、両腕は胸前で左手を



箱根神社 鳥居

前にして笏を執って威儀を正す姿が表されています。面貌は鼻すじが高く神々しい威厳に満ちた表情で彩色もよく残存しており、関東地方では最も古い神像の一つとされています。

今回、ゼミ旅行を通じて実際訪れてみた感想としては、思ったより木目の劣化がわかりやすかったのと、重文指定以外の像もなかなか深みがあって面白いと感じました。

また、いくつかの美術館を訪問したのですが、現代アートのものが多かったのですが、屋外展示という形のは初めて体験したので、非常に刺激になりました。

箱根関所を訪れて：山口千穂

箱根関所は、江戸時代第一の主要道路である東海道を監視するために設置された重要な関所である。箱根関所が現在の場所に置かれたのは江戸時代の初期、元和五年（1619）のことといわれている。箱根関所の役割は、関所構内に掲げられた御制札（高札）に記載されており、旅人が関所を通るには様々な検査が行われていた。関所を通る旅人によっては関所通行手形を持っていなければならないケースもあり、箱根関所では江戸から出て行き関西方面へ向かう女性、「出女」の場合は、幕府の御留守居役が発行した証文（女通行手形）を必ず所持し、手形に記載された内容と持参した女性の特徴が一致しなければ、関所を通ることはできないという厳しい取り調べが関所の役人たちによって行われていた、ということが事前学習で学んだことである。

箱根関所に入って初めに思ったことはとにかく広いということである。箱根関所内に牢屋があり、そこは実際に入ることができるようになっており、罪人体験ができる。他の建物には当時の役人の人形が置いてあり、その時代の雰囲気を感じることができた。そこには人見女という出女を調べる役人の人形や関所の最高責任者である判頭の人形などが置いてあり、箱根関所がどういう所なのかを見て学ぶことができた。人見女という仕事をしていた人がどういう人なのかを気になったので調べてみると、出自は百姓で、代々世襲だったことがわかった。

敷地が広く、施設も大きいということは当時それだけ重要な場所だったことがうかがえる。関所を通るには証文を持ち、特徴が合わなければ通ることができないということはわかっていたが、実際にどういうルールがあるのかを調べてみた。すると、傷ついた人、死人、不審者は証文を持っていないと通ることができないという1つのルールがあった。死人までもが通ることを許さない厳しさに当時の関所におけ

る取り締まり体制の厳しさがわかった。

江戸後期になると伊勢参宮や湯治などへ町人や百姓が出かける時には、家主や名主あるいは旅人宿なども関所手形を発給していたということを調べてわかり、このことから旅人だけでなく百姓までもが関所を通り旅行を楽しんでいたことが考えられる。

足軽番所では足軽が生活できるように足軽のための寝床がある。何かあった時にすぐにつけつけることができるようになっており、足軽番所は役人が生活していた大番所の次に大きい。箱根関所では足軽の存在が大きいと思われる。

敷地内に箱根関所について詳しく学ぶことができる資料館があり、展示されているものを見てより関所について深く学ぶことができた。箱根関所以外にも関所があるので訪れて、箱根関所との違いを感じてみたいと思った。

参考文献

箱根町 箱根関所『よみがえった箱根関所』<https://www.hakonesekisyo.jp/index.html>

『東海道箱根関所と箱根宿』丹治健蔵 岩田書院 2019年



箱根神社



箱根関所

2023 年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

発行 2024 年 2 月 28 日

編集・刊行 龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

〒600-2368 京都市下京区七条大宮東入大工町 125-1